

# いわき地方と三浦半島の閉窩式銚頭

高橋 健

**要旨** 日本列島の先史時代の銚頭については、日本列島全体を視野に入れた伝播系統論の枠組みが提示されている。しかし、遠く隔たった地域間の系統関係が論じられる一方で、資料的な制約もあり地域的な編年研究はあまり行われてこなかった。本稿では、比較的多くの資料が得られている福島県いわき地方と神奈川県三浦半島を対象として閉窩式銚頭の編年的研究を行った。

いわき地方の資料を寺脇型・真石型・薄磯型に分類し、寺脇型を真石型の大部分よりも古く位置づけ、真石型内部での変遷過程を示した。薄磯型の出現過程については、技術的共通性を有しながらも独自性を保っていた仙台湾・三陸地方との関係が変化し、その影響を受けて成立したと考えた。三浦半島の資料を三浦型と呼称し、弥生時代中期後半に尖頭で単距・双距の銚頭が現れ、後期に入ると刃溝をもつ銚頭や三距の銚頭が出現するという編年案を示した。弥生文化と続縄文文化における横方向索孔をもつ銚頭については、その出現過程が各地域で多様であることから、必ずしも一つの中心地から広域への強力な、あるいは玉突き状の伝播によるものと解釈する必要はないと考えられる。

## 1 はじめに

日本列島先史時代の閉窩式銚頭としては、縄文時代後晩期の仙台湾・三陸地方のいわゆる燕形銚頭が代表的なものである。一方、数量的には燕形銚頭に及ばないものの、閉窩式銚頭がある程度まとまって出土する地域・時期がこれ以外にも存在する。例えば、続縄文時代前半期の北海道南部、縄文時代晩期の福島県いわき地方、弥生時代の神奈川県三浦半島などが挙げられよう。これらの閉窩式銚頭については、列島規模の枠組みの中でその伝播や系統が論じられてきた。筆者は、続縄文文化の銚頭の編年研究をもとにこの問題について言及したことがあるが（高橋 2001・2004）、北海道以外の地域の詳細な検討は行ってこなかった。本稿では、福島県いわき地方と神奈川県三浦半島を対象として、閉窩式銚頭の編年的研究を行う（図1）。

## 2 目的と方法

### 2-1 伝播系統論の枠組み

まず、閉窩式銚頭についての伝播論・系統論の枠組みのうち主なものについて、本稿に関連する範囲で概観しておきたい。

渡辺誠は、燕形銚頭の起源を東北地方の雄形銚頭である「南境型」・「沼津型」銚頭に求め、近代の鉄製銚頭ツキンボにまでつながる伝播系統論を展開した（渡辺 1973）。少なくとも閉窩式銚頭に関する限り、仙台湾を起源地とした一元的かつ漸進的な伝播プロセスを想定しているのが特徴であ

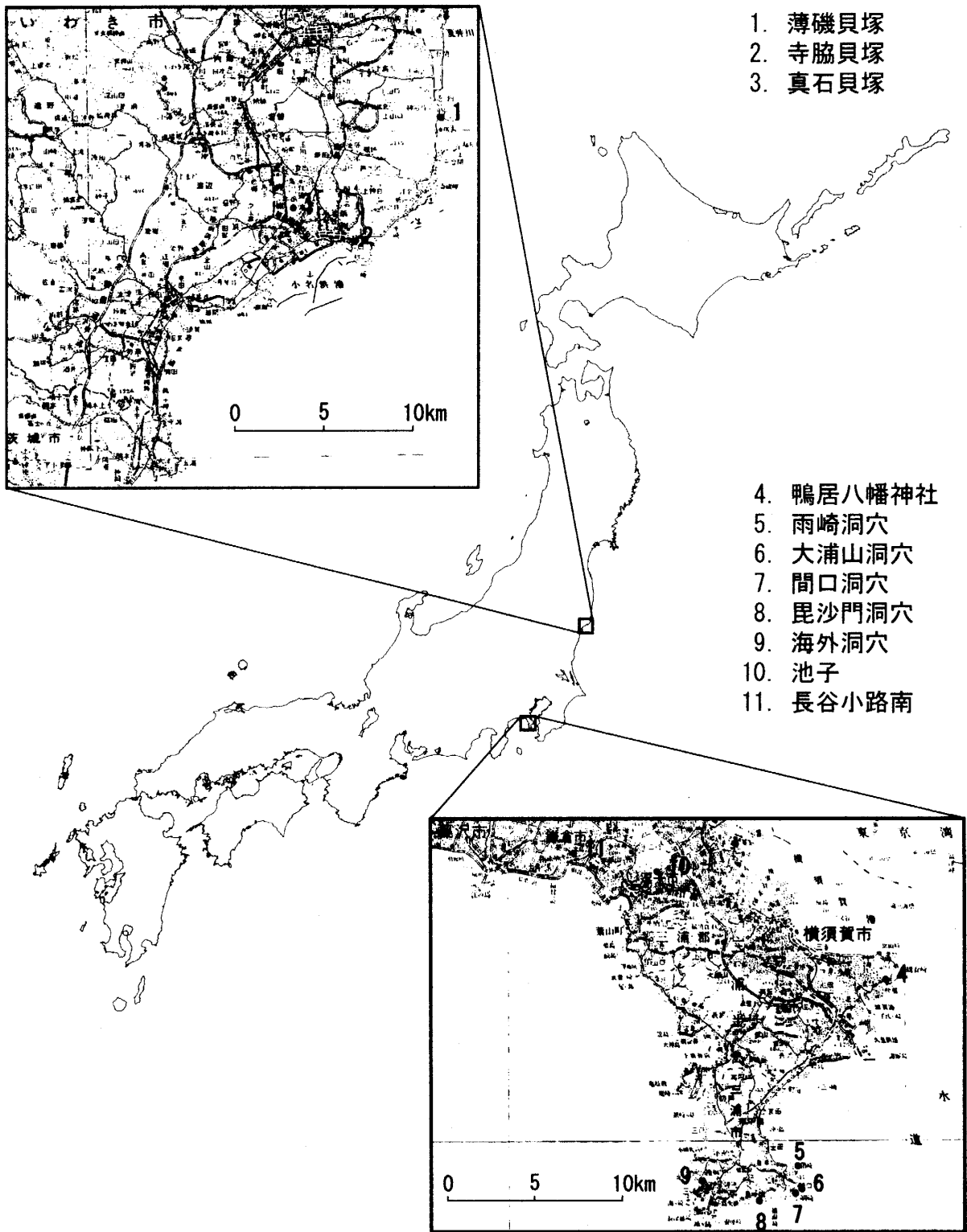


図1 いわき地方・三浦半島の閉窩式銚頭出土遺跡

る。大竹憲治は渡辺の立場を基本的に継承して、弥生時代に燕形銚頭が北海道から中国地方まで広がると述べた（大竹 1991）。近年、渡辺は弥生・古墳時代の銚頭について全国的に集成・考察しているが、基本的な議論の枠組みに変化はない（渡辺 2000）。

山浦清は渡辺説を「一系統論」と表現し、これに対して「二系統論」と自ら呼ぶ立場を表明した（山浦 1996）。雌形銚頭の起源地を大陸に求め、2つの伝播経路、すなわち、沿海州から朝鮮半島を経由して九州・西日本に至るルートと黒龍江流域から北海道、東日本太平洋側に至るルートを想定している。このうち、特に大陸の資料の位置づけにはなお問題が残されているが、弥生時代の銚頭を多元的に捉える視点は重要であるといえよう。

弥生文化・続縄文文化の閉窩式銚頭に対しては、近年改めて注目が集まっている。山浦は西日本弥生時代の銚頭と「恵山型」銚頭を結び付けた系統論を展開している（山浦 1999・山浦 2004 a）。これは前述した「二系統論」に関わる資料の一部の見直しを伴っているが、それが「二系統論」の枠組み全体にどう影響するのかについては、はっきりした言及がみられない。前田潮は、続縄文文化と弥生文化の閉窩式銚頭の索孔の方向に注目し、縄文晩期直後に三陸沿岸で生じた索孔の方向転換という現象が、銚漁の担い手であった専門的特殊技能集団によって北海道から東海地方にまでもたらされたと想定している（前田 2000）。また、設楽博己は前田の視点を継承し、横方向の索孔をもつ閉窩回転式銚頭を「側面索孔回転式銚頭」と呼称し、当時の東日本における遠隔地交流を裏付ける証拠の一つとしている（設楽 2003）。渡辺らが東日本から西日本への時期的傾斜をもった漸進的な伝播プロセスを想定しているのに対し、山浦・前田・設楽らは同時期に隔たった地域から出土する点を積極的に評価し、遠隔地間の飛び石的な交流を想定している点が注目される。

## 2-2 対象と用語

本稿では、いわき地方と三浦半島の骨角製閉窩式銚頭<sup>1)</sup>を扱う。これらの地域や続縄文時代の閉窩式銚頭も含めて、「燕形銚頭」という名称で括られることがある。しかし、本稿においては「燕形銚頭」の指す範囲を、基本的に縄文時代後晩期の仙台湾・三陸地方の資料に限定し、いわき地方や三浦半島、北海道の資料は含めない<sup>2)</sup>。ただし、これは出土地によって機械的に資料を振り分けることを意味するのではない。いわき地方や三浦半島、北海道の資料は、「燕形銚頭」とはやや異なった型式学的な特徴をもつ資料群が地域的なまとまりを形成している。これに対して、例えば千葉県余山貝塚出土の閉窩式銚頭については（岸上 1911）、関東地方において非常に例外的な存在である上に、型式学的にも仙台湾・三陸沿岸の「燕形銚頭」と区別する理由はなく、「燕形銚頭」の南限の出土例とする理解に問題はないだろう。本稿においても、いわき地方における「燕形銚頭」の存在に触れることがある。

本稿で用いる銚頭に関する基本的な用語を図2に示した<sup>3)</sup>。繫索を装着するための索溝や索孔とは別に、ソケット周囲におそらく器体補強用と考えられる溝が設けられることがある。この溝については、索溝とは区別して、締付溝と呼ぶことにする。また、銚頭の回転面を基準として、これと

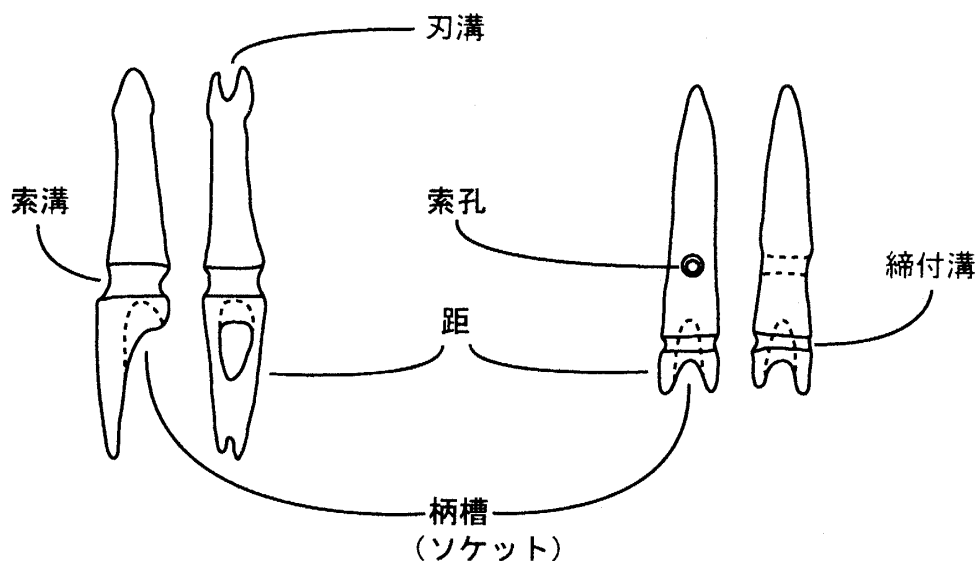


図2 閉窩式銚頭の部分名称

直交する方向を横，平行な方向を縦とする。

### 3 いわき地方

#### 3-1 遺跡

いわき地方には縄文中期から弥生時代にかけての貝塚が多く分布しており，昭和初期からその存在が知られていた（八代 1932）。本稿で考察の対象とする閉窩式銚頭は，寺脇貝塚と薄磯貝塚の両遺跡から多く出土しており，また真石貝塚からも出土例がある。ここで簡単にこれらの遺跡の調査史に触れておく<sup>4)</sup>。

真石貝塚は小名浜湾に面した平野の中央部に突出した丘陵上に位置し，縄文後期末から晩期末にかけて形成された貝塚である（図1-3）。戦前に幾度かの調査が行われ大洞C2式に伴う骨角器群が報告されたが，この中に1点の閉窩式銚頭が含まれている（磐城市教育委員会 1966，西村 1968）。

寺脇貝塚は小名浜湾の東部の丘陵上に位置する（図1-2）。戦後に松野照武による発掘が行われ豊富な骨角器を含む多くの資料が出土したが，残念ながら正式な報告は行われず，部分的に紹介されているのみである。1957年には江坂輝弥によって修生院冷泉寺裏手のA地区の調査が行われた。後述する緊急調査の報告書と発行年は前後したが，1968年に『小名浜』として報告書が刊行された（いわき市教育委員会磐城出張所 1968）。1961年には墓地拡張のためのA地区の発掘調査が行われ，その後団地造成のためのB地区・C地区の発掘調査も行われた。これら一連の緊急調査については，1966年に『寺脇貝塚』として報告書が刊行された（磐城市教育委員会 1966）。これら2冊の報告書によって，銚頭や釣針をはじめとする多数の骨角器が報告された。

薄磯貝塚は小名浜湾の北、塩屋崎と富神崎に挟まれた薄磯地区に位置する(図1-1)。戦後になって存在が知られた遺跡であり、1980年に磐城高校史学部によってそれまでの踏査の報告書が刊行された(磐城高等学校史学部後援会 1980)。1982年には、A~Gの7地区のうちA地区において土地造成に伴う緊急調査が行われ、多数の骨角器を含む大量の遺物が出土した(いわき市教育委員会 1988)。縄文晩期前半から弥生中期前葉にかけて形成された35枚の貝層から、いわき地方の骨角製漁撈具の変遷過程を知る上で非常に重要な資料が得られている。

### 3-2 分類

#### 3-2-1 分類の方針

いわき地方の閉窩式銚頭の分類案としては、馬目順一と渡辺誠によるものが代表的である。馬目は『寺脇貝塚』において、閉窩式銚頭をA型(有脚銚頭)とB型(有尾銚頭)とに大別している(馬目 1966)。有脚型・有尾型という名称は、馬目が用いている一般的な分類名称をいわき地方に適用したものである。渡辺は、銚頭の形態や構造に基づいた名称ではなく、基本的に遺跡名を冠した分類名称を用いることを提唱した(渡辺 1973)。いわき地方の銚頭は「燕形」と「寺脇型」とに分類されている。馬目と渡辺の分類の着眼点や結果に大きな違いはみられないが、他地域との関連を論じるためには、「有尾型」や「燕形」等の名称を用いるのは都合が悪い面がある。

筆者は、渡辺の主張するように銚頭の形態や構造に基づいた分類に「大した意義は認められない」とは考えていないが、地域的・時期的なまとまりをもつ一群の資料に対して遺跡名を冠した分類名称を用いるという方法は有効だと考えている<sup>5)</sup>。したがって本稿においては、遺跡名を冠した名称によって閉窩式銚頭を分類する。

#### 3-2-2 本稿の分類

いわき地方の閉窩式銚頭を寺脇型、真石型、薄磯型に分類する(図3)。

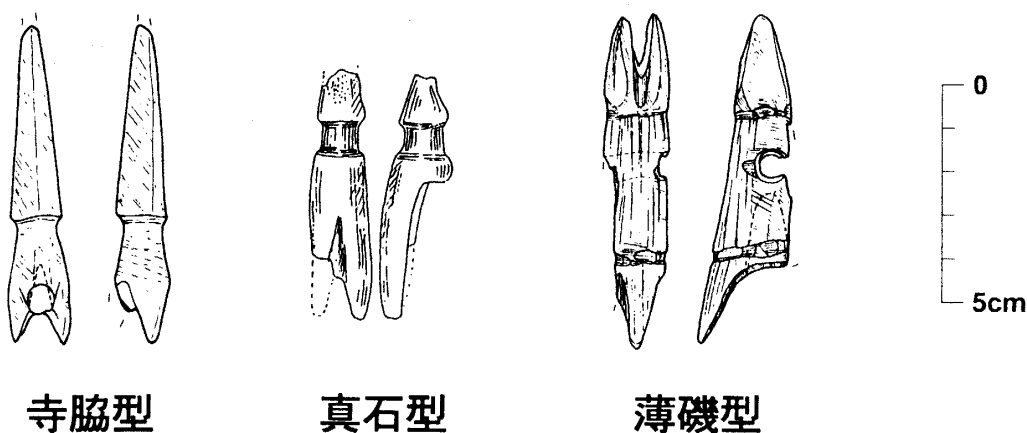


図3 いわき地方の閉窩式銚頭の分類

寺脇型は、渡辺（1973）によって寺脇貝塚出土資料を基準に設定されたものと変わらない。閉窩式銚頭のうち、尾部の距の側面観が対称的なものである。

真石型は寺脇型と異なり、尾部の距が非対称につく閉窩式銚頭である。燕形銚頭と共通する形態であるが、燕形銚頭が基本的に索孔をもつものに対して、索孔ではなく索溝をもつ点が特徴である。真石貝塚出土資料（図3中央）は頭部を欠くが、索溝と距の形態はこのタイプの特徴を示している。完形品を含む多数の資料が寺脇貝塚、薄磯貝塚から出土しているが、寺脇型・薄磯型と区別するために真石型の呼称を採用する。

薄磯型は、大竹（1985・1987）によっていわき地方の弥生時代の銚頭として報告されたタイプである。真石型と同様に尾部の距が非対称につく閉窩式銚頭であるが、器体が大形で横方向の索孔をもつ点が異なっている。

これらの閉窩式銚頭の抵抗機能について簡単に触れておこう。真石型と薄磯型が回転式に分類されることに異論はないだろうが、寺脇型については非回転式（鉤引式）だとする意見もみられる（山浦 1996）。確かに、対称な側面観をもつ尾部は積極的に回転機能に寄与するものとはいえないが、繫索の装着位置から、少なくとも索溝をもつ寺脇型については回転式だと判断することができる<sup>6)</sup>。索孔をもつ寺脇型については繫索の通し方とも関わってくるため判断が難しいが、繫索をループ状に通していたとすれば鉤引式に分類される。しかし、索溝と索孔の違い以外の点では共通性が高いこと、全体に逆鉤が発達しないことから、本稿では抵抗機能による分類を行わず、まとめて閉窩式銚頭として扱うことにしたい。

### 3-3 研究略史

ここでいわき地方の閉窩式銚頭の研究について、編年論を中心に概観しておく。馬目（1966）は寺脇貝塚の報文中で、仙台湾・三陸地方と比較したいわき地方の特徴として9項目を示した。その内容は現在でも通用するものであり、以下の6点に整理することができる。1.寺脇型の存在、2.真石型に刃溝をもつ例が多い、3.寺脇型・真石型ともに索孔をもたず索溝をもつ例が多い、4.尾部が背面側に強く張り出さない、5.鋭い逆鉤をもたない、6.大形品が存在しない。閉窩式銚頭の編年案も示唆されていたが、「形態変差が激しく、編年的な問題に関しては解決される見通しは薄い」とも述べており、比較資料がないことを理由に結論は保留されていた。

一方、渡辺（1973）は、寺脇型を「燕形」の派生形態と位置づけた。これは仙台湾・三陸地方と比較していわき地方の閉窩式銚頭が後出することによるもので、いわき地方の内部での編年を意図したものではなかったと考えられる。寺脇型と真石型はともに大洞C2式期とされている。

馬目（1980）は、薄磯貝塚採集の燕形銚頭（図10）を報告した際に、寺脇貝塚出土資料との違いが地域差の範囲を越えているとして、時期差として解釈している。その後、馬目（1982）は縄文時代全体を通じたいわき地方の漁撈具の変遷過程を論じたが、この中でも両貝塚の断絶が強調されている。

大竹(1988)は、1982年に行われた薄磯貝塚の発掘調査の成果に基づいて、いわき地方の漁撈具の変遷過程を論じた。縄文時代前期から弥生時代までをⅠ～Ⅴ期に区分しているが、このうちⅣ・Ⅴ期が薄磯貝塚の層位的成果に基づいており、Ⅳ期はa～cに細分されている。Ⅳ期aが後期末～大洞B式期、Ⅳ期bが大洞BC式期、Ⅳ期cが大洞C1・C2式期、Ⅴ期が弥生中期前葉に相当する<sup>7)</sup>。閉窩式銚頭はⅣ期aに出現してⅣ期bに発達し、Ⅴ期の薄磯型銚頭につながる。

### 3-4 問題の所在

前項でみたように、いわき地方の閉窩式銚頭の変遷過程について具体的に論じた研究は意外に少ない。その中で、馬目(1966)は、「単純な外形のみから判断すれば」との但し書き付きながら、「A→BⅠa→BⅡ→挿型への変遷」を考えている。A型は寺脇型、B型は真石型に相当するから、寺脇型を真石型よりも古く位置づけ、真石型の中での変遷過程を示したことになる。しかし、前述したように、仙台湾・三陸地方との形態差が大きいことを理由に、結論を出すには慎重であった。寺脇型が「古式の様相」を示すという見解は、東北地方に散見される「有脚型」銚頭を燕形銚頭の祖形として位置づける系統観(馬目1980・1983)を反映したものだ<sup>8)</sup>。その後の馬目の論考では、寺脇型の形態にいわき地方の独創性が指摘されるに留まり、寺脇型と真石型に関わる編年については言及されなくなるが(馬目1980・1982)、薄磯貝塚の燕形銚頭の帰属時期については、寺脇貝塚よりもおくれる「大洞C2式後葉から大洞A式期にかけての時期」と推測している(馬目1980)。

また、大竹(1988)は薄磯貝塚の層位的発掘成果に基づいた編年案を示している。この編年は、出土する土器型式により貝層の時期を決定し、35枚の貝層を大きく4期区分にまとめた上で、それぞれの時期に伴う骨角器を配列するという方法によっている。しかし、土器の変化と骨角器の変化における画期が一致する保証はないので、この方法では変化のプロセスを的確に捉えられない可能性があり、結果として示された編年図は一時期にかなり多様な形態の銚頭を含むものとなっている。もちろん同時期に異なる形態の銚頭が併用された可能性はあるが、詳細な層位的情報を十分に生かすためには、まず銚頭の相対編年を行ってから土器型式との対比を行うべきであろう。

本稿では、特に寺脇型の編年的位置、真石型の変遷過程、薄磯型の出現過程に注意を払いながら、いわき地方の閉窩式銚頭の編年について考察する。いわき地方出土の閉窩式銚頭のうち管見に触れたものは約50点であり、このうち43点を図示した。

### 3-5 寺脇型の編年的位置について

#### 3-5-1 寺脇貝塚出土資料

まず、寺脇貝塚から出土し寺脇型設定の基準となった6点の資料を確認しておこう(図4-1～6)。繫索の装着方法、頭部・尾部形態などに多様なバリエーションがみられるが、寺脇型全体としての編年的位置づけを探ることを目的とするため、これ以上の細分は行わない。

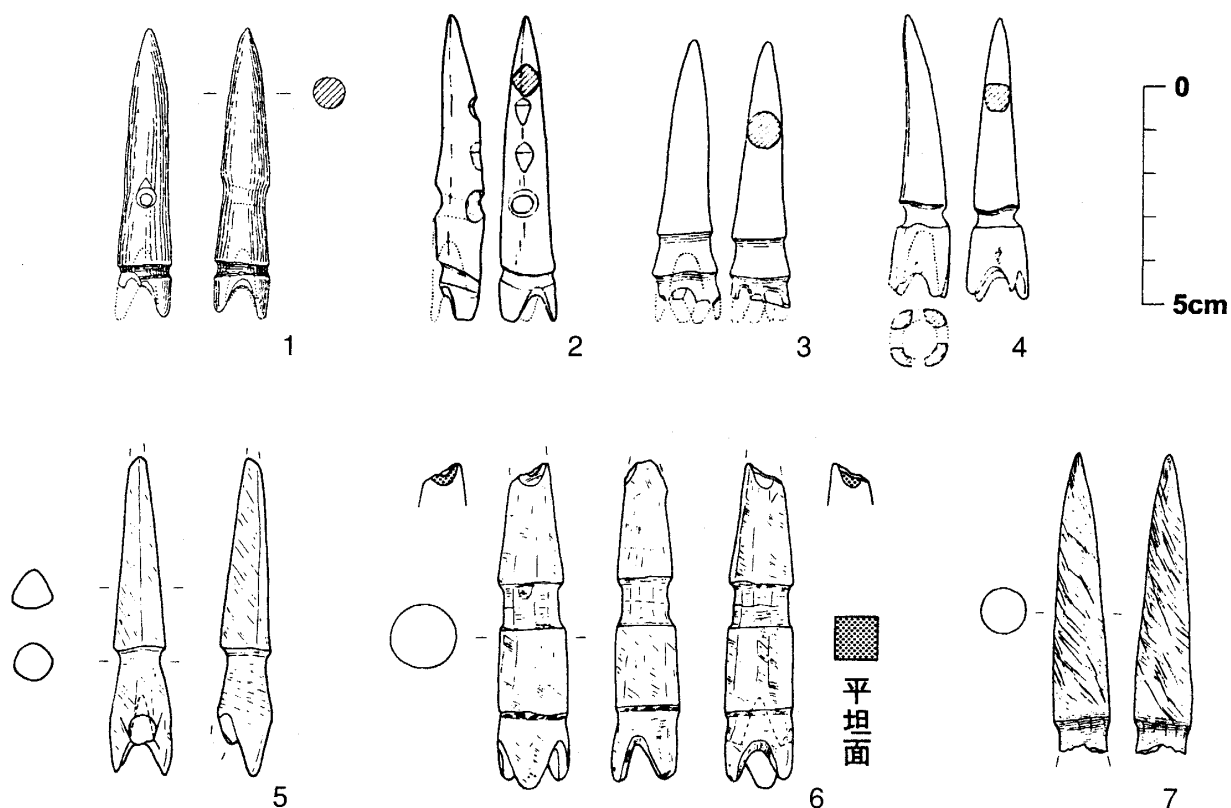


図4 寺脇型銚頭  
(1～6 寺脇貝塚, 7 薄磯貝塚)

図4-1・2は索孔をもつ資料である。2点とも尖頭で尾部は三距，締付溝がソケットの周囲を巡っている。1の頭部が断面円形で単純に尖るのに対し，2は頭部片側に浅い切り込みを3箇所入れて装飾的な鈍角の逆鉤状にしており，先端の断面形が四角形を呈する。3～6の4点は索溝をもつ。3・4はともに尖頭で尾部が四距の資料である。3は胴部下半に2段のくびれをもつが，上側が索溝，下側が締付溝に相当すると考えられる。4ははっきりした索溝をもち，締付溝はない。5は尖頭・三距で，下縁がはっきりしないくびれ状の索溝をもつ。頭部の断面形は三角形に近く，全面に擦痕が著しい。

6は，かつて先端に刃溝をもつ疑いが強いと報告された資料である（江坂・渡辺 1968）。他の寺脇型よりやや大形で，幅の広い索溝をもつ。尾部は三距で，ソケット周囲を浅いくびれ状の締付溝が巡る。頭部は欠損しており，破損面に溝の痕跡等は残されていないが，折れ口の直下の両側に斜めの平坦面が一部残存している。また，側面観ではこの平坦面の直下がわずかにくびれている。先端に鏃を装着する銚頭が刃溝の部分で破損する例はしばしばみられるが，刃溝の一部や鏃固定用の加工が残されることはあっても，このような平坦面が残る例は管見の限りない。この平坦面については，2にみられるような逆鉤状の切り込みの痕跡と考えたほうがいだろう。ただし，2とは異



なり両側に切り込まれている。もちろん、失われた先端部に刃溝をもっていた可能性が否定されるわけではないが、刃溝の存在を想定する積極的理由もない。

### 3-5-2 頭部形態の検討

真石型が基本的に刃溝をもつという特徴は早くから指摘されてきた(馬目 1966)。ここでは、この頭部形態に関する規制がどの程度強力なものであったかを検討する。寺脇貝塚と薄磯貝塚から出土した銚頭の頭部形態をタイプごとに集計した(表1)。明確に分類できる資料のみを扱っているため、出土した銚頭の総数とは一致しない<sup>9)</sup>。

表1 閉窩式銚頭の頭部形態

	刃溝	尖頭	不明	計
寺脇型	0	5	1	6
真石型	19	0	5	24
薄磯型	2	0	2	4
計	21	5	8	34

この表からは、寺脇型/真石型の分類と尖頭/刃溝の頭部形態の別が対応していることが明らかである。このことは頭部の破片からだけでも寺脇型と真石型を区分できることを示している。

### 3-5-3 薄磯貝塚出土資料

図4-7は薄磯貝塚の19層から出土した、大形で下半を欠く資料である。尖頭で全面に擦痕が著しく、やや浅い索溝の上半を残している。下端にはソケットの先端部の痕跡が残っている可能性がある。前項で検討した頭部形態の特徴を踏まえると、この資料は寺脇型の頭部である可能性が極めて高い。

### 3-5-4 編年的位置の検討

寺脇型銚頭の出土例は、これまで寺脇貝塚に限られるとされてきた。前項では、薄磯貝塚出土資料中に寺脇型の可能性が高い資料が存在することを指摘したが、この1点の資料を加えても、両貝塚における寺脇型と真石型の比率には依然として大きな違いがある。この寺脇型の偏在については、地域差と時期差という両方の説明が可能である。寺脇型を「古式の様相」とする馬目(1966)の編年観は時期差という説明につながるものだといえる。これに対して大竹(1989)は、寺脇型を大洞C2式期に位置づけた上で、「薄磯貝塚では1点も出土していないことから、寺脇のみで生産された離頭銚であることが窺える」と述べている。寺脇貝塚と薄磯貝塚における地域差を示唆する見解である。

しかし、両遺跡は直線距離でわずか9kmしか離れておらず、小名浜湾に面しているか否かという違いはあるものの、それほど大きな環境差があったとは思われない。寺脇型銚頭以外の漁撈具、すなわち真石型銚頭やいわゆる寺脇型釣針などは両遺跡に共通してみられることから、両地域の集団の漁撈技術伝統に大きな違いがあったとも考えがたい。したがって、寺脇型と真石型との間にはなんらかの時期差がある可能性が高いといえよう。

薄磯貝塚出土の図4-7は19層から出土したが、後でみるように、薄磯貝塚の真石型のほとんどは18層以上から出土しているため、これは寺脇型を真石型よりも古いとする年代観を裏付けるものである。19層の出土土器は晩期前葉のものが最も多く、晩期初頭～前葉に位置づけられている。

前述したように寺脇貝塚出土資料の大半は層位的情報を欠いている。『寺脇貝塚』では、一部の骨角器について出土地区と深さが記載されているものの、土器型式との対応関係や銚頭相互の関係をj知することは難しい。一方、『小名浜』には資料の出土層位が記載されている。1957年の調査では、A地点にA・Bの2本のトレンチが設定され、報告されている銚頭6点は、全てAトレンチ3区から出土している<sup>10)</sup>。Aトレンチの層位は8層に分層されているが、3～5層の混土貝層は発掘時には区分することが困難だったとされ、遺物は3～5層が貝層、8層が貝層下土層として報告されている<sup>11)</sup>。貝層・貝層下土層はそれぞれ縄文晩期・後期に対比されている。貝層出土土器は、大洞C2式が圧倒的に多い。報告されている銚頭は、真石型が4点と寺脇型が2点である。貝層からは真石型が3点出土したのに対し(図6-4・5, 図8-15), 貝層下土層からは真石型1点(図8-14)と寺脇型2点(図4-1・6)が出土した。この層位的出土状況は、寺脇型が古く真石型が新しいという前後関係の存在を示唆している。貝層下土層については、出土土器が少ないことから「貝層下土層が単一の文化層を構成していたとは認めがたい」と述べられており、事実A-3区の貝層下土層からは土器が出土していない。しかし、A-1・2区の貝層下土層出土土器は後期中葉・後葉のものが主体を占めているので、A-3区の貝層下土層もやはり後期中葉・後葉に位置づけられる可能性が高い。

これらの層位的所見を合わせると、寺脇型銚頭の使用の中心的時期は、両貝塚における貝層の主体的形成時期とされている後期中葉より古く、晩期前葉かそれ以前にあった可能性が高い。しかし、後期後半安行I式期の貝層から出土した寺脇貝塚B地点出土資料に閉窩式銚頭が全く含まれていないことから、遡っても後期末葉までとみなすのが妥当であろう。全体としては真石型よりも古く位置づけられるが、1957年調査の貝層下土層で両者が共伴していることから、一部並行していた可能性はある。

### 3-6 真石型の変遷過程

#### 3-6-1 真石型の細分

真石型を頭部形態により、以下のように細分する(図5)。

- a類：頭部直下がくびれる。
- b類：頭部直下に、刃溝と同方向の孔(鏃固定孔)をもつ。
- c類：頭部直下の両側に、浅い逆鉤状突起を作り出す。
- d類：頭部直下に、器体を一周する溝(鏃固定溝)を設ける。

これらの頭部の加工は、いずれも刃溝に鏃を固定する機能をもつと考えられる。馬目は燕形銚頭および真石型銚頭の頭部の孔・くびれ・逆鉤状突起がいずれも鏃の装着に関係することを指摘して

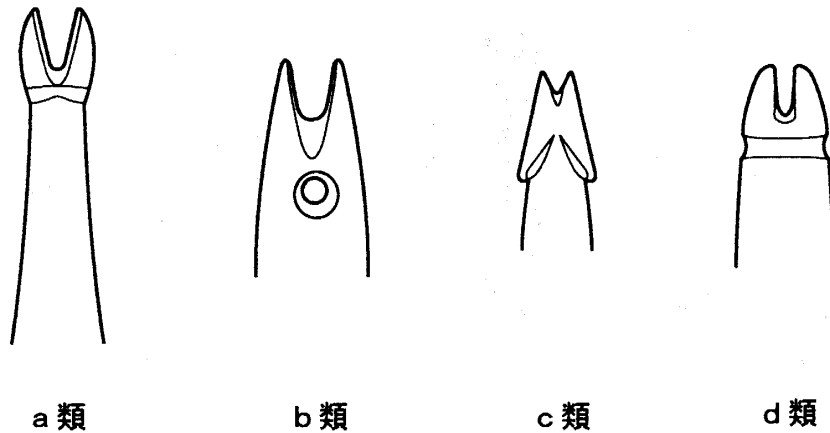


図5 真石型鉦頭の分類

いる（馬目 1967・1980）。「索孔」・「索溝」の用語は繫索装着用の孔・溝に限定して用いるため、b類・d類にみられる頭部直下の孔・溝については、「鍔固定孔」・「鍔固定溝」と呼ぶことにしたい。

真石型の変遷過程について触れた論考は、馬目が寺脇貝塚の報告中で示唆したものが唯一のものである。前述したように、ここで示された変遷過程は、「B I a→B II→挿図型」というものであった。該当する資料を本稿の分類基準に当てはめると、真石型 a類→b類→c類の変化に相当する。

### 3-6-2 資料の検討

以下、寺脇貝塚と薄磯貝塚から出土した資料を検討する。なお、真石貝塚出土資料（図3中央）については、頭部形態が不明であり、本稿の細分基準を適用することが困難だったので、検討の対象としていない。寺脇貝塚と薄磯貝塚から出土した鉦頭の細分型式ごとの数量を表2に示しておく。

表2 各タイプの出土数

	寺脇型	真石型				計
		a類	b類	c類	d類	
寺脇貝塚	6	4	4	2	2	18
薄磯貝塚	1	0	3	5	5	14

#### a類

a類は薄磯貝塚からは出土しておらず、寺脇貝塚から4点が出土している（図6-1～4）。1・2は先端から索溝までが長いのに対して、3・4は短い。1・3は尾部が先細りになっており、4のように尾部の平面形態が長方形になる真石型の中では特徴的である。また、1～3は索溝の幅が比較的狭く深いのに対して、4は2列の削り痕が残る幅広い索溝をもち、後述するb類・c類と共通する。このように、尾部や索孔の形態において4はb・c類と共通する要素を多くもつ。1～3の出土状況は不明だが、4は1957年調査の貝層から出土している。

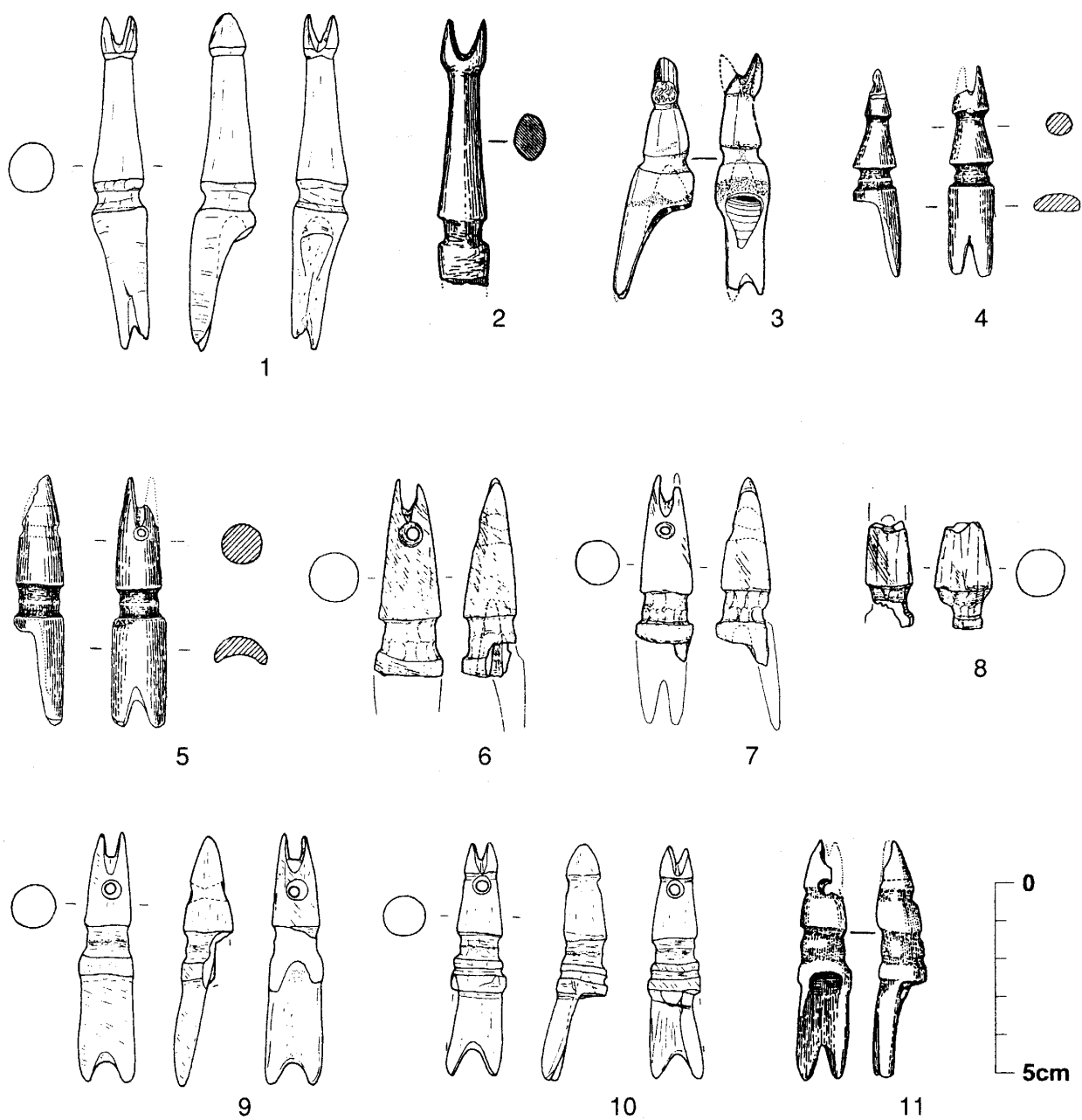


図6 真石型鈎頭 a類・b類  
 (1~5・9~11 寺脇貝塚, 6~8 薄磯貝塚)

**b類**

b類は薄磯貝塚から3点(図6-6~8)と寺脇貝塚から4点(図6-5・9~11)が出土している。頭部形態は、刃溝と鍍固定孔のみをもつもの(5~7・9)と、鍍固定孔と接して器体を一周する溝をもつもの(10・11)とがある。後者についてはd類との中間形態とみなすこともできよう。それ以外の部分については、サイズも含めて非常に斉一性が高い。7点全てが、索溝の幅が広く削り痕が2列残っている点でも共通している。また、ソケットの縁の形状が角張る点も特徴といえよう(6~8・10)。なお6は他の資料に比べてソケットが深いが、筆者の観察によれば、本来1cm程度の深さだったのが、ソケット奥壁の海面質が破損したことによって見かけ上深くなったものである可能性がある。10は索溝の直下に幅の狭い締付溝をもつ。

b類の中に、尾部の背面上端がくびれている一群の資料が存在する(9~11)。この尾部背面上端のくびれはb類に特徴的でa~c類にはみられないが、b類以外で同様の特徴をもつ資料が、図7-1である。幅広・寸詰まりの銚頭で、頭部には刃溝をもつが、鍍装着用の加工は特にみられない。あるいは再加工品なのかもしれない。筆者の観察ではソケットは著しく浅く、開窩に近いといってよいほどであり、ソケットに柄を挿入するだけで銚頭を固定できたとは考えられない。この銚頭が実用品かつ完成品だったとすれば、何らかの補助的な支えが必要だったはずであり、尾部背面上端のくびれの部分に紐を巻くことによって柄を支えた可能性がある。b類銚頭にみられる尾部背面上端のくびれや、図7-2の尾部背面上端に切られた溝についても、同様の機能を推測することができよう。真石型の尾部は、長くて背面への張り出しが弱く、先端の切り込みが浅いため板状を呈するという特徴がある。したがって、くびれや溝などの加工を特にもたない資料についても、尾部に紐を巻いて柄の固定を助けた可能性は否定できない。もし以上の想定が正しければ、真石型銚頭の尾部は、距としての役割だけでなく、柄を固定するソケットの延長のような役割も果たしていたことになる。この仮説の妥当性の検証は今後の課題としたい。

薄磯貝塚のb類3点は、B-1区東側とC-1区西側の15・17・18層から出土している。15~18層にかけてのある程度限定された時期に用いられたとみていいだろう。15層は大洞C2式土器を主体とする。報告書掲載資料によれば、17層は大洞C1式土器が多く、18層は大洞BC式からC2式にかけての土器が多いようである。したがって、薄磯貝塚におけるb類銚頭の使用時期は、大洞BC式期からC2式期にかけてと推測される。寺脇貝塚のb類で出土層位が分かるものは貝層出土の1点(5)のみであり、貝層は大洞C2式が主体であるから、薄磯貝塚における年代観と矛盾しない。

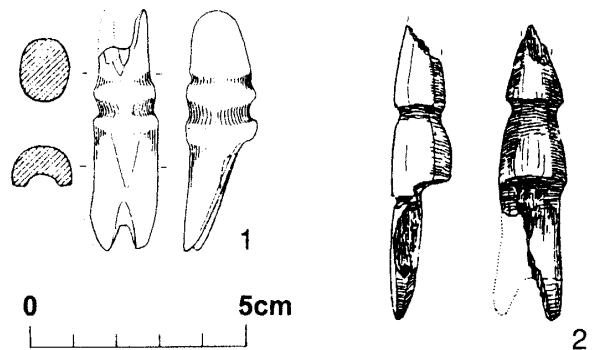


図7 真石型銚頭  
(1・2 寺脇貝塚)

## c類

薄磯貝塚から5点(図8-1~5), 寺脇貝塚から1点(7)が出土している。7を除いて、やや細身の資料である。逆鉤状突起は浅く、逆鉤としての抵抗機能を発揮したとは到底考えられない。索溝は浅く滑らかな資料(1・3・5)と、幅が広く2列の削り痕がみられる資料(2・4・7)とがある。1のように締付溝をもつ例もある。1・7は刃溝と逆鉤の方向が通常と90度ずれている。なお6は薄磯貝塚出土の尾部破片であるが、細身であることと、浅い索溝の縁を切り込んで強調している点が3と共通することから、c類である可能性が高い。

寺脇貝塚における出土状況は不明だが、薄磯貝塚のc類5点は、0・1・7・12の各層から得られている。このうち7層から2点、12層から1点出土しており、7層・12層は15層より上位に堆積していることから、c類は15層以下から出土したb類よりも新しく位置づけられる。報告書掲載資料によると、7層と12層はともに大洞C2式土器が主体と考えてよさそうである。一方、0層と表土出土の2点が接合した資料(5)と1層出土の資料(3)が出土層位に伴うとすると、c類の使用時期の下限が弥生時代中期前葉にまで下がることになる。しかし、この時期には薄磯型が用いられていること、0層・1層からは縄文時代の土器も出土していることから、これら2点は何らかの事情で混入したものと考えておくことにする。したがって、c類の帰属年代は7~12層の大洞C2式期と推定される。

## d類

d類は、薄磯貝塚から6点(図8-8・9・11~13), 寺脇貝塚から3点(10・14・15)が出土している。溝の形状などが多様な資料を含むため、一つのまとまりとしてよいかどうかやや疑問が残る。

8~10は幅の狭い鍬固定溝をもつ資料であるが、それ以外の点の変異が大きい。8は、頭部の刃溝と鍬固定溝ははっきりしているが、胴部の加工痕をどう考えるべきかが難しい。一応、製作ないし再加工途中の段階と理解しておく。9は横方向の刃溝をもつ資料であるが、ソケットの縁が角張っている点でb類と類似する。10は索溝をもたず胴部がやや膨らむ。いわき地方には類例がほとんどなく、位置づけは難しい。

11~13は再加工の痕跡を残す資料である。11は刃溝両壁の先端外側に溝の痕跡を残しており、本来この位置に鍬固定溝をもつ銚頭だった銚頭を再加工したと考えられる。先端部を欠く12・13は索溝と鍬固定溝が接しており、やはり再加工によって生じた形態であろう。

14・15は、8~10よりも幅広で深い鍬固定溝をもつ。索溝と鍬固定溝の位置が近いことから、やはり再加工された可能性がある。15は頭部に「人」の字形に交差する刻みが入る。

寺脇貝塚出土のd類は、14が貝層下土層、15が貝層から出土しており、後期末葉から晚期中葉までの幅をもつ。これに対して、薄磯貝塚のd類5点のうち3点は攪乱出土であるが、出土層位が明らかな2点のうち、11は大洞C2式土器を主体とする15層、8は大洞B式・BC式土器を主体とす

いわき地方と三浦半島の閉窩式銚頭

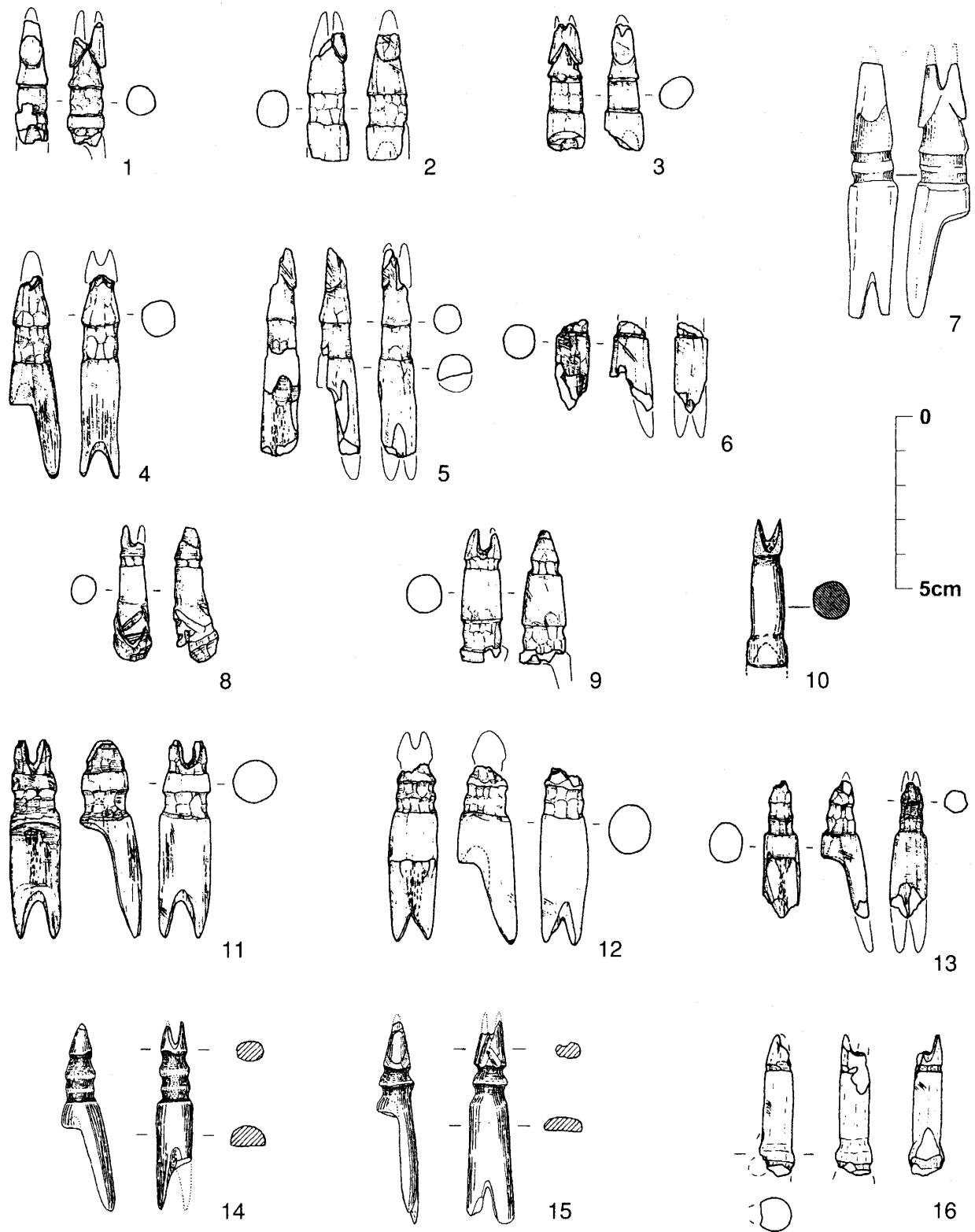


図8 真石型銚頭c類・d類など  
 (1~6・8・9・11~13・16 薄磯貝塚, 7・10・14・15 寺脇貝塚)

る24層から出土した。24～15層という出土層位は、晩期前葉から中葉に位置づけられ、寺脇型およびb類の出土層位と重なっている。一方、後述するように真石型とは異なる特徴をもつ資料であるが、弥生中期前葉の3層から出土した16は、頭部形態においてd類と共通する。このため、d類は晩期中葉以降も継続して作られた可能性が高い。したがって、d類は少なくとも晩期前・中葉を通じて寺脇型及び真石型b・c類と並行して作られ、おそらくは晩期中葉以降まで残ったと推測することができよう。

### 3-6-3 変遷過程の検討

両貝塚の層位的出土状況から、寺脇型（後期末葉?～晩期前葉）→真石型b類（晩期前葉～晩期中葉）→真石型c類（晩期中葉）という関係を導くことができた。d類は、ほぼ全時期にわたって他のタイプと並行して作られていた。問題となるのはa類の位置づけである。

a類は寺脇貝塚からのみ出土していて、薄磯貝塚からは出土していない。このことから、寺脇型と同様に、b・c類より前に位置づけるのが妥当であろう。寺脇貝塚の貝層においてb類と共存している点が問題となるが、貝層がある程度の時期幅をもつと考えておきたい。また、この貝層出土資料（図6-4）は、前述したように索溝や尾部の形状などb・c類に近い要素をもっており、a類の中では新しいといえる。

共に真石型b・c類より前に位置づけられたa類と寺脇型の関係については手がかりが少ないが、薄磯貝塚19層出土資料（図4-7）は、寺脇型がb類とかなり近接した時期まで使われていたことを示している。したがって、寺脇型と真石型a類は同時期に共存していたと考えておく。表1に示した頭部形態との強固な対応関係を考慮すると、両者が尖頭／刃溝という頭部形態の違いに対応して作り分けられていたのかもしれない。また、表2に示した各タイプの消長からは、寺脇貝塚と薄磯貝塚の形成時期が重なり合いながらもその盛期にやや差があり、寺脇貝塚が先行していたことを読み取ることができる。

## 3-7 薄磯型の出現過程

### 3-7-1 薄磯型

薄磯型銚頭は、薄磯貝塚から4点が出土している（図9-1～4）。1・2は全体的に極めて類似した資料である。大形で刃溝と径の大きい横方向の索孔をもち、尾部は双距、縮付溝が器体を一周する。尾部形態を三距とする復元図が示されているが、筆者の観察によればどちらも三距に見合うだけの幅はなく、双距だったと考えられる。1・2ともに頭部の直下がかくびれるが、2は頭部全体の背腹面を平面的に削って尖らせているため、頭部形態は多少異なっている。3は胴部破片であるが、大形でやや薄い器体、縮付溝の存在など、1・2と共通する特徴を備えている。索孔の方向は縦横どちらもありうるが、1・2との類似性を重視して、横方向の索孔とやや左に片寄った尾部をもつ銚頭であったと考えておきたい。一方、4は頭部から腹面側にかけて欠損している資料であ



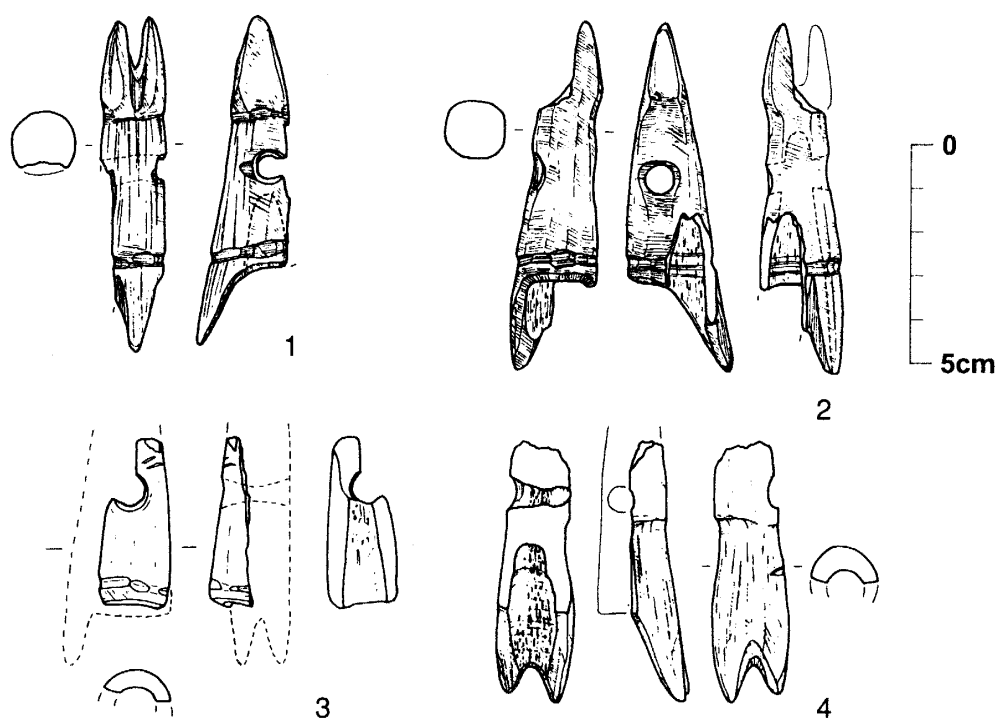


図9 薄磯型銚頭  
(1～4 薄磯貝塚)

る。大形で横方向の索孔をもち、双距である点は他と共通するが、索孔の部分で胴部がふくらむ、器体を一周する締付溝をもたないなど、いくつかの相違点がみられる。

報告書によれば1・2は出土地点不明とされているが、弥生時代中期前葉の1層から出土した3・4の2点、特に3との型式学的共通性から、前二者についても弥生時代中期前葉に属するという位置づけに問題はない。

### 3-7-2 薄磯型出現の契機

薄磯貝塚の発掘調査においては、縄文時代晩期後葉から弥生時代前期にかけての資料はほとんど出土しなかった。しかし、いわき地方ではこの時期に大きな人間集団の交代があったとは考えられておらず、薄磯貝塚を残した集団も入れ替わっていたとは想定しにくい。薄磯型銚頭についても、真石型の系譜をひいて成立したと考えられている(大竹 1985・1987)。この見解は当を得ていると思われるが、真石型と薄磯型の間にはなお型式学的な懸隔がある。特に、索孔のいわき地方への導入がいつどのように行われたのかが問題になる。

ここで、図8-16の銚頭に注目したい。薄磯貝塚の3層から出土したもので、弥生時代中期前葉に位置づけられる。索孔の部分で折れて下半を欠損しているが、溝をもつ頭部形態は真石型d類と共通する。背面には尾部の折れ口が残っているが、類例がないため尾部形態は全く分からない。折れ口の位置から判断すると、刃溝は縦方向、索孔は横方向と考えられる。胴部は細長い円筒状で、

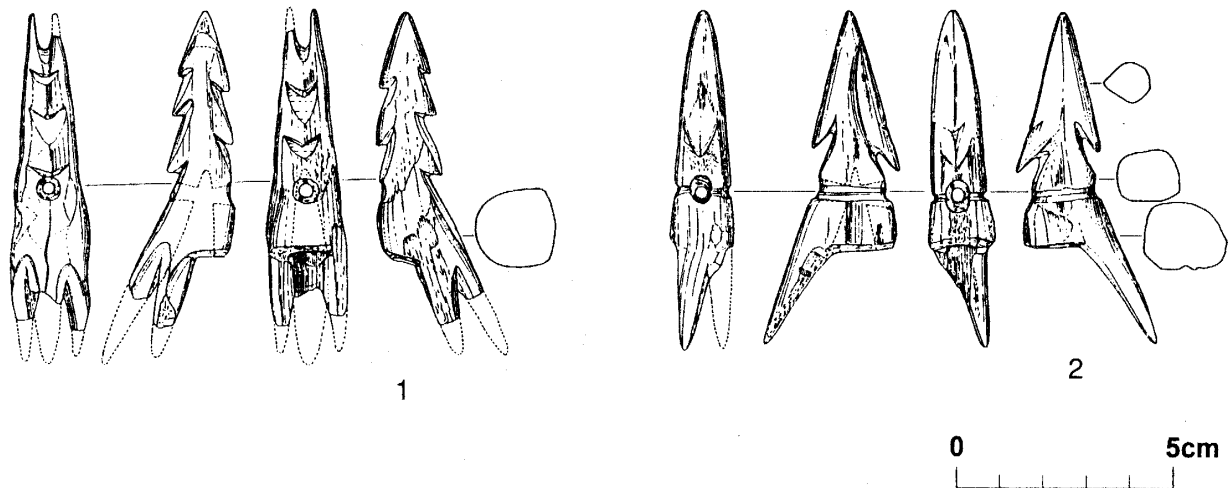


図10 燕形銚頭  
(1・2 薄磯貝塚)

索孔部にかけてわずかにくびれた後ふくらむ。索孔の位置は上半部の中心軸から背面寄りにずれている。索孔と接して器体を一周する溝が下端に残っている。索孔をもつという特徴は、一般的な真石型とは大きく異なる一方で、全体の形態は薄磯型とも全く異なっている。

図8-16と形態的に類似した資料としては、寺脇貝塚出土の10が挙げられる。真石型d類の頭部形態にくわえ、細長い円筒状で下部がふくらむ胴部の形態も類似している。10の帰属時期が不明確なため確実ではないが、16は胴部のふくらむ真石型d類に索孔が導入されることによって生じたと思定することができる。

それでは、どのような契機により真石型銚頭に索孔が導入されたのであろうか。図10に示したのは、馬目によって報告され、「大洞C 2 式期後葉から大洞A 式期にかけて」の時期に位置づけられた、薄磯貝塚A地点採集の燕形銚頭の一部である(馬目 1980)。出土状況不明で一括性もない上に、仙台湾・三陸沿岸における晩期後葉の燕形銚頭の様相が不明であるため、年代的位置づけは難しい。しかし、1982年の薄磯貝塚の発掘調査では類例が全く出土しなかったため、晩期中葉以降とする年代観は説得力を増したといえよう。3点の燕形銚頭を含む4点の閉窩式銚頭が報告されているが、このうち2点を図示した。図10-1は典型的な三距の燕形銚頭といってもよいだろう。2については、索孔と接して溝が器体を一周しているのが注目される。縮付溝とするには位置が高すぎるので、繫索装着に関連する可能性が高い。繫索の装着法を考える上で非常に興味深い。同様の溝が図8-16にもみられることに注意しておきたい。索孔の導入に当たっては、このような燕形銚頭の影響があったと考えられる。

### 3-8 いわき地方における閉窩式銚頭の変遷

いわき地方の閉窩式銚頭を寺脇型、真石型、薄磯型に分類し、真石型をさらにa~d類に細分し

いわき地方と三浦半島の閉窩式銚頭

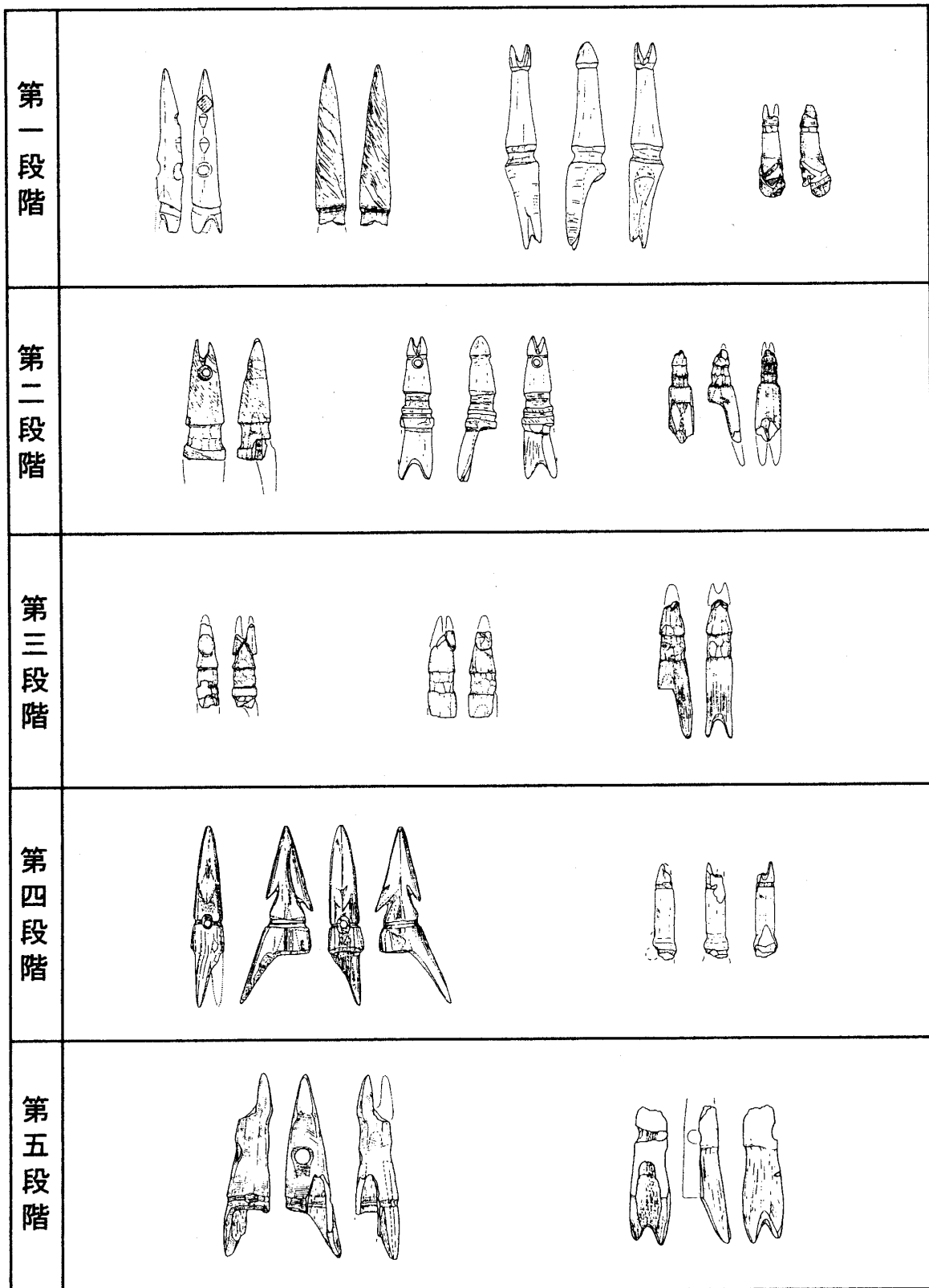


図11 いわき地方における閉窩式銚頭の変遷 (S = 1 / 3)

た上で、編年的考察を加えた。その内容をまとめたのが図11であるが、基本的に馬目によって予察されていた編年案を層位的成果によって追認するものとなった。ただし、寺脇型と真石型a類との前後関係を確認することはできなかつたため、第一段階において並行するものと考えておいた。燕形が直接流入し、その影響によって真石型に索孔が導入される時期を第四段階とした。薄磯貝塚1982年調査の層位でいうと、第一段階が19～24層、第二段階が15～18層、第三段階が7～12層、第四段階が3層、第五段階が1層に対応している。この調査で出土しなかつた時期も含めて考えると、第一段階が縄文時代後期末葉から晩期前葉、第二段階が晩期前葉から中葉（大洞BC～C2式期）、第三段階が晩期中葉（大洞C2式期）、第四段階が晩期後葉から弥生時代中期前半、第五段階は弥生時代中期前半に位置づけられる。大竹（1988）による時期区分と比較すると、第一段階がⅣ期a、第二段階がⅣ期b・c、第三段階がⅣ期c、第五段階がⅤ期に対応するが、個々の資料の位置づけなどはやや異なっている。

## 4 三浦半島

### 4-1 遺跡と調査研究略史

三浦半島周辺において、閉窩式銚頭は図1に示した8遺跡から出土している。これらの遺跡は、おおまかには半島先端部の海蝕洞穴遺跡（5～9）と、半島の付け根により近い開地遺跡とに分けることができる。後者はさらに、海岸砂丘に立地する遺跡と（4・11）、海岸からやや内陸に入った平地に位置する集落遺跡（10）とに分けられる。基本的に一遺跡からの出土数は少なく、1点のみの場合が多い。

三浦半島における海蝕洞穴遺跡の存在は戦前から知られていたが、戦後になって赤星直忠と横須賀考古学会、神奈川県立博物館などによる調査が進められた。1980年代までに知られていた閉窩式銚頭は全て海蝕洞穴遺跡から出土したものだったが、1990年代になると開地遺跡からの出土例がみられるようになった。

三浦半島の漁労具については、劔持輝久や神澤勇一による集成が行われている（劔持1972・1993、神澤1988）。三浦半島における弥生時代の漁撈活動について総合的に考察が加えられ、銚頭についても漁撈対象の推定など機能論的な研究が行われた。海蝕洞穴遺跡と集落遺跡の関係、あるいは漁撈の担い手の問題についても古くから注目されてきたが、最近樋泉は池子遺跡の動物遺存体の分析に基づいて、集落遺跡内に専門的な漁撈集団が農耕民と共生していた可能性を指摘している（樋泉1999）。しかし、資料数が非常に限られていることもあり、閉窩式銚頭そのものの編年的研究はほとんど行われてこなかった。

一方、三浦半島の閉窩式銚頭を縄文時代の燕形銚頭を引き継ぎ現代の鉄製銚頭へとつながるものとして捉える視点は、研究のごく初期の段階にすでに示されていた（赤星1952）。渡辺による弥生・古墳時代の銚頭研究は基本的にはこの視点の延長上にあり、三浦半島の資料を含む弥生・古墳時代の閉窩式銚頭を全国的に集成し、列島規模の伝播系統論を展開している（渡辺2000）。しかし、考

察の主眼が東北地方中部から西日本への「燕形銚頭」の漸進的で時間的傾斜を伴う伝播プロセスを裏付けることに置かれているため、三浦半島の資料の形態やその時期的変化にはあまり注意が払われていない。

本稿では、現在得られている資料によって、三浦半島の閉窩式銚頭のおおまかな変遷過程を描き出してみたい。先行研究と比較して資料はほとんど増加していないが、大浦山洞穴出土資料の正式報告と（三浦市教育委員会 1997）、池子遺跡における出土例によって（かながわ考古財団 1999b）、三浦半島の閉窩式銚頭の変遷過程についてある程度の見通しを得ることが可能になったと考えられる<sup>12)</sup>。

## 4-2 資料と分類

### 4-2-1 三浦型の設定

管見の限りでは、三浦半島の海蝕洞穴からは、大浦山洞穴、間口A洞穴、毘沙門B・C洞穴、海外洞穴、雨崎洞穴から計10点の閉窩式銚頭が出土している。このうち複数の資料が出土したのは大浦山洞穴から2点<sup>13)</sup>、間口A洞穴から4点である。開地遺跡からは、鴨居八幡神社遺跡と長谷小路南遺跡から1点ずつ、池子遺跡から2点が出土している<sup>14)</sup>。これらの資料は、弥生・古墳時代に属し、基本的に横方向の索孔をもっている。これらの資料を三浦型銚頭と呼ぶことにする。

### 4-2-2 三浦型の細分

これまでの研究では、三浦型銚頭を基本的に頭部形態、すなわち刃溝の有無によって分類してきた（劔持 1972・1993、神澤 1988）。本稿では、鏃の固定方法と鏃の方向によってさらに細分する（図12）。

**a類**：尖頭のもの。

**b類**：刃溝と鏃固定孔をもつもの。刃溝は横方向（回転面と直交）。

**c類** 刃溝と目釘孔をもつもの

**c 1類**：刃溝が横方向（回転面と直交）。

**c 2類**：刃溝が縦方向（回転面に平行）。

三浦型銚頭は、完形ないし比較的良好な遺存状態を示す例が多く、現在までに知られている資料は全て頭部形態により細分可能である。

## 4-3 三浦型の変遷過程

神澤は、三浦型銚頭の頭部形態（刃溝の有無）と尾部形態（距の数）の関係を検討し、対応関係を見出すのは難しいと結論づけた（神澤 1988）。確かに両者の間に厳密な対応関係は存在しないが、時期ごとにおおよその傾向を見出すことは可能だと考える。

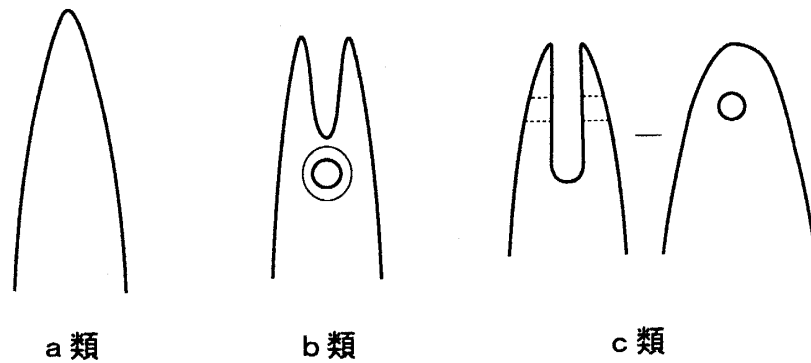


図12 三浦型銚頭の分類

## 4-3-1 a類

図13-1・2は、大浦山洞穴から宮ノ台式土器に伴って出土した<sup>15)</sup> (三浦市教育委員会 1997)。尾部はいずれも単距であるが、1は距の背面に横方向の溝をもつ。弥生時代中期後半の資料である。

3・4は、池子遺跡No.1-A地点から出土した (かながわ考古学財団 1999b)。3は単距、4は双距であり、大浦山洞穴出土例と比較すると大形である。No.1-A地点からは宮ノ台式期の旧河道に堆積した木製品や骨角器などの遺物が大量に出土しており、これらの銚頭も弥生時代中期後半に属する。

5は、間口洞穴から昭和二十年代の調査で出土した (赤星 1953)。双距で大形の資料だが、ソケットが大きいので器体は比較的薄い。腹面には鹿角表面の凹みを残し、締付溝が器体を一周している。出土位置は下層の最下部とされているが、この調査で出土した土器は弥生後期以降のものに限られているので (神澤 1959)、この銚頭も後期に位置づけてよいだろう。

6は、長谷小路南遺跡の遺構外から出土した資料である (長谷小路南遺跡発掘調査団 1992)。下半を欠くため尾部形態は不明である。報告書では帰属時期に触れていないが、遺構外出土の中世以前の遺物全体に対して、「弥生時代後期後半～古墳時代前期：奈良平安時代」というおおまかな年代観が与えられている。遺構外出土遺物の空間的分布には時期的なまとまりがみられるようだが、銚頭の出土地点が不明なので時期決定の参考にはならない。三浦型銚頭の使用年代を奈良平安時代にまで下げる積極的理由は他にないことから、弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけてのものと捉えておきたい。

この他にa類に属する資料が、雨崎洞穴から1点出土している (横須賀考古学会 1984)。ソケット腹面側が破損しており、尾部は三距である。弥生時代後期～古墳時代前期の土器に伴って貝層から出土したものである。

## 4-3-2 b類

図13-7は、間口A洞穴のI区8層 (第1混貝灰層) から出土した (神奈川県立博物館 1973)。

いわき地方と三浦半島の閉窩式銚頭

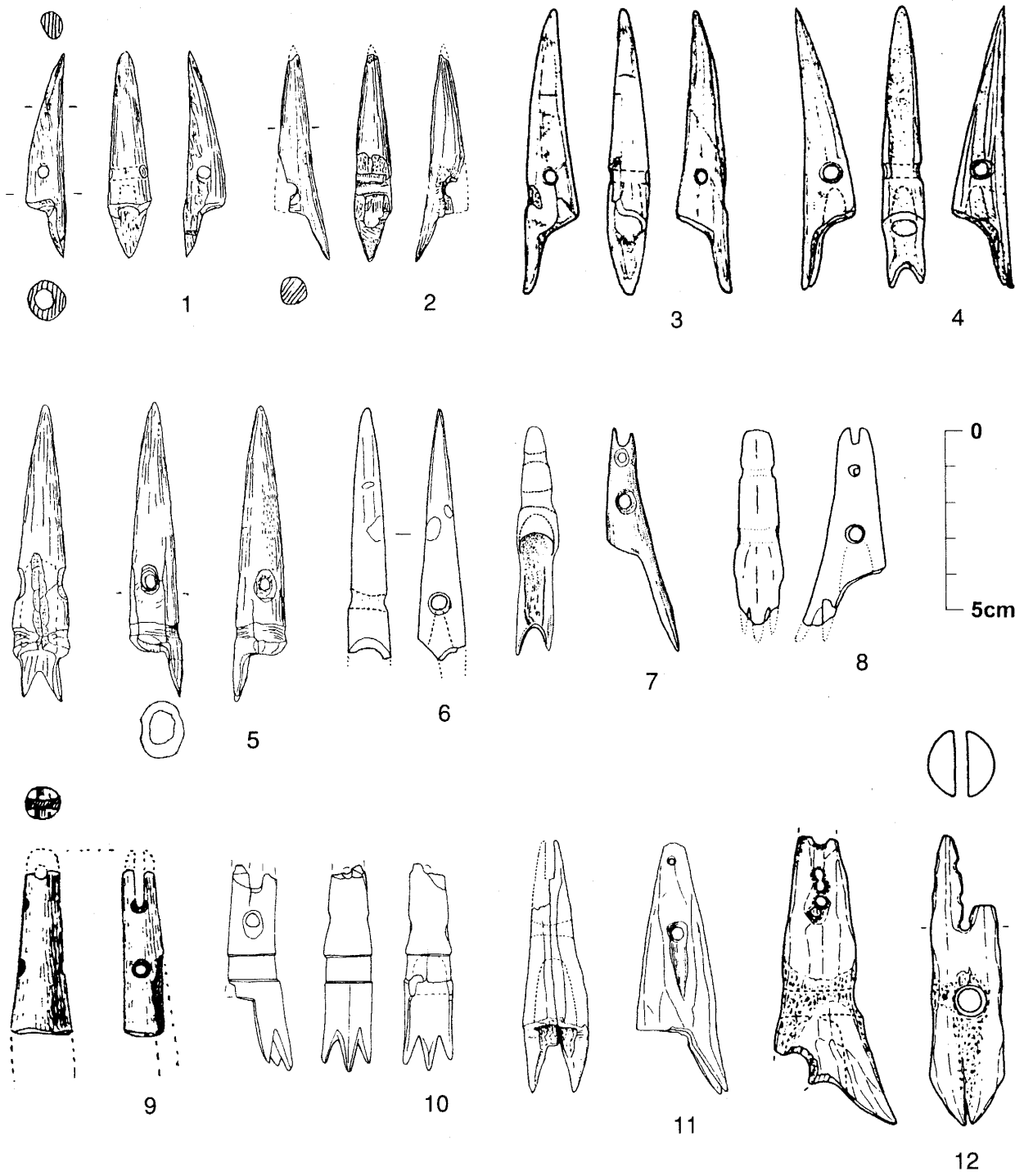


図13 三浦型銚頭

(1・2 池子, 3・4 大浦山洞穴, 5・7・10・11 間口A洞穴, 6 長谷小路南,  
8 毘沙門B洞穴, 9 毘沙門C洞穴, 12 鴨居八幡神社)

弥生時代後期に位置づけられる。ほぼ完形で、三浦型の中では器体の長さに比して尾部が長い。頭部の刃溝の切り込みは比較的浅く丸みを帯びている。尾部と胴部の境はわずかにくびれている。尾部は双距で、距の切込みは山形ではなく丸みを帯びている。

8は、毘沙門B洞穴の下層最下部から出土した（赤星 1953）。下層からは弥生時代後期の土器が出土している。全体に作りがやや粗い。刃溝は比較的浅く、尾部はやや破損しているが三距である。

#### 4-3-3 c1類

図13-9は、毘沙門C洞穴の下層下部貝層から出土し、弥生時代後期とされている（赤星 1953, 東京国立博物館 2003）。頭部をやや破損し尾部を完全に欠く。先端には横方向の刃溝と目釘孔の一部が残存している。

10は、間口A洞穴のⅡ区8層（弥生時代後期）から出土した（神奈川県立博物館 1974）。頭部は破損しているが、横方向の刃溝と目釘孔の一部が残存している。胴部と尾部の形態は独特である。胴部には幅広でしっかり作られた締付溝をもつ。尾部は均等な山形の切込みが2箇所入った三距で、背面に稜をもつ。

海外洞穴からも、c1類が1点出土している（海外洞穴調査団 1983, 横須賀考古学会 1984）。頭部はやや破損しているが、横方向の刃溝をもち、目釘孔をもつという。尾部は三距である。出土層位は弥生時代後期～古墳時代前期である。

#### 4-3-4 c2類

図13-11は、間口A洞穴のⅠ区8層（弥生時代後期）から出土した（神奈川県立博物館 1973）。縦方向の刃溝と目釘孔をもち、尾部は双距である。片側を欠く刃溝の内側には酸化鉄(?)が付着している。全体に金属器による切断痕が残るが、ソケット奥壁が破損していることから、未成品ではなく使用されたものだろう。

12は鴨居八幡神社遺跡5層から出土した（横須賀市教育委員会 1994）。5層は古墳時代から古代にかけての遺物包含層であるが、古墳時代後期主体で他の時期の遺物はきわめて少なかったと報告されているため、この資料についても古墳時代後期と考えてよいだろう。索孔は縦方向で、三浦型銚頭の中では特異な資料である。器体も大形である。尾部は単距で、頭部とソケットの一部が破損している。刃溝製作に伴う穿孔と目釘孔の穿孔が繰り返し行われた痕跡を残す。

#### 4-3-5 変遷過程

三浦型銚頭は弥生時代中期後半（宮ノ台式期）に出現する。この段階においては、単距ないし双距のa類のみが存在する（図13-1～4）。弥生時代後期に入ると、刃溝をもつb～c2類の銚頭が現れる（7～11）。尾部形態は双距ないし三距である。なお、後期にもa類の使用は継続するが（5）、単距の例はなく、三距の例が出現する。



三浦型銚頭の大半は弥生時代後期、あるいは弥生時代後期～古墳時代前期に位置づけられていて、より細かな土器型式との対比は難しい。また、1遺跡からの出土点数が少ないため、相対的な層位関係のデータもほとんど得られていない。このため、変遷過程をさらに細かく把握するのは困難であるが、型式学的にはb類→c1類→c2類という変遷を想定することができる。

尖頭で単距・双距の資料を古く位置づけ、刃溝や三距などを後出の要素とすることに対しては、燕形銚頭において既に刃溝や三距の要素がみられることから、不自然さを感じる向きもあるかもしれない。確かにこれらの要素そのものは燕形銚頭にすでにあるだけでなく、縄文晩期中葉まで増加する傾向にあるが、銚頭の形態が必ずしも定向的に進化するとは限らない。機能的にも、刺突機能や抵抗機能、破損しやすさなど素材の入手・製作など多くの要因が複雑に関係していたと考えられるので、刃溝をもつ銚頭や三距の銚頭を単純に発達した形態とみなすことはできない。

問題になるのは、間口A洞穴で同一層位からb～c2類の各タイプが出土したという事実である。この共伴関係を重視すれば、b～c2類に時期差を認めず、同時期におけるバリエーションと理解することも可能かもしれない。しかし、間口洞穴の8層（第一混貝灰層）は、上半部と下半部で出土土器に違いがありながらも厳密には区分できなかつたとされており、弥生時代後期の中でも時期差のある資料を含んでいる。したがって、8層から出土した3点の銚頭も、弥生時代後期という幅の中であっても、多少の時期差を有していた可能性はある。中期後半有東式に伴ったとされる静岡県清水市石川Ⅱ遺跡出土資料がb類であること（設楽 2003）、古墳時代後期の鴨居八幡神社遺跡出土資料がc2類であることは、上述の変遷観を多少なりとも支持するものだといえる。

古墳時代後期に属するのは鴨居八幡神社遺跡出土資料のみである。大形で縦方向の索孔をもつなど、他の三浦型とは様相を異にしている。尾部が単距になっていることも含め、古い要素の残存ではなく、三浦型銚頭の末期の崩れた形態とみなしておきたい。

## 5 地域間の比較

いわき地方と三浦半島に於ける地域編年の検討を行った。その成果に基づいて地域間の比較を試みたい。縄文時代のいわき地方と仙台湾・三陸地方、弥生時代の北海道を含めた日本列島東北部を対象とする。

### 5-1 縄文時代のいわき地方と仙台湾・三陸地方

燕形銚頭については、特にその起源論と用途論についての研究が多く行われてきた。一方、出土状況が不明な資料が大半を占めること、未公表資料が多いことなどの理由から、編年研究については停滞気味であったといわざるを得ないが、1973年には渡辺誠の著作において大規模な集成が行われ（渡辺 1973）、また1983年には馬目順一による編年が試みられた（馬目 1983）。その後、里浜貝塚や田柄貝塚での層位的発掘による資料が報告され、北田（2002）による集成・編年も行われているものの、詳細な編年研究が困難であるという状況に基本的に変化はみられない。ここでは、刃溝

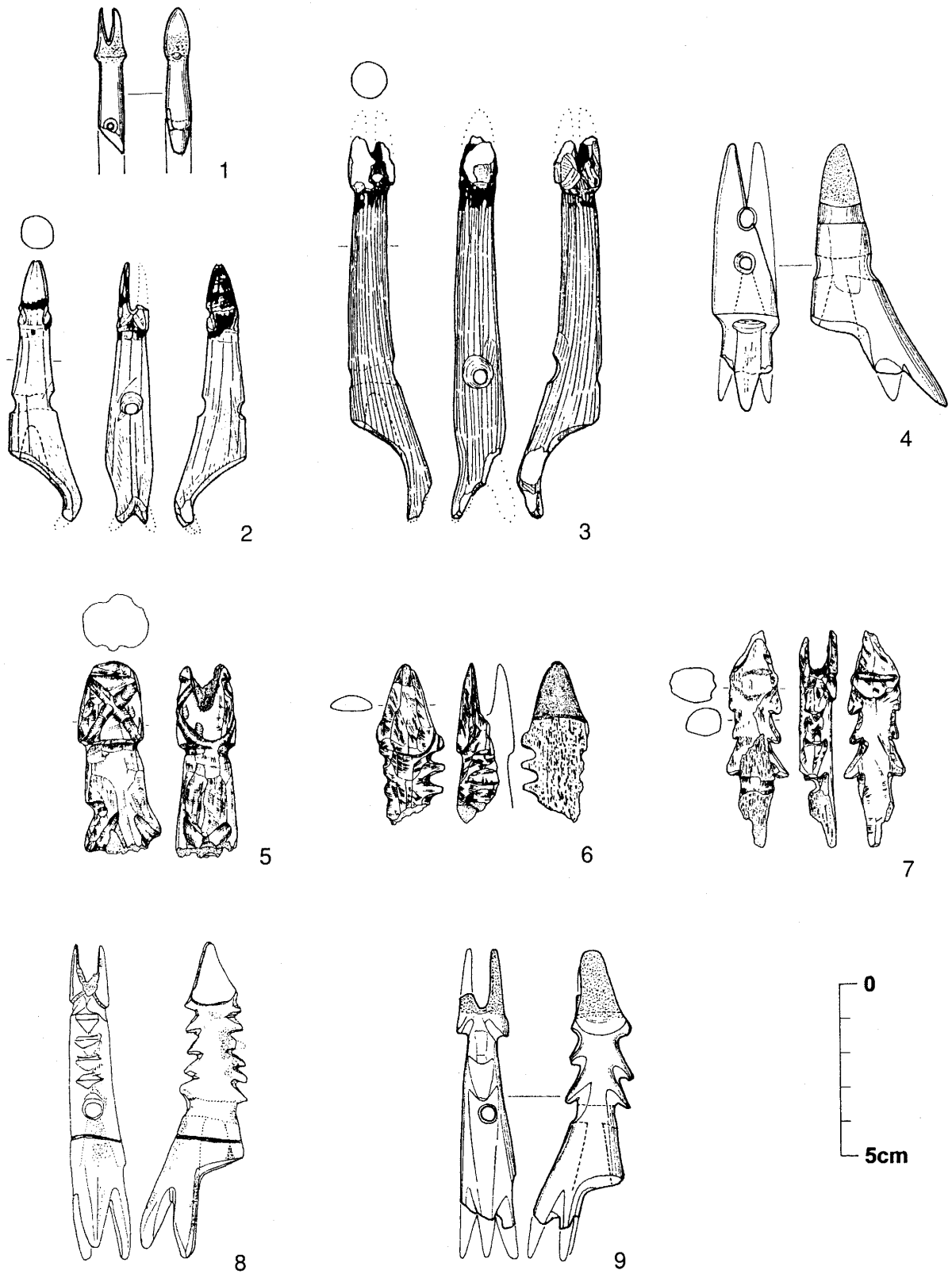


图14 燕形銚頭

(1 大洞貝塚C地点, 2·3 田柄貝塚, 4 浦島貝塚,  
5~7 里浜貝塚, 8 瀬澤貝塚, 9 大洞貝塚B地点)

をもつ銚頭の頭部形態の時期的変化に注目し、いわき地方と仙台湾・三陸地方との対比を行う。渡辺・馬目の編年に用いられた資料から時期的変化を抽出し、里浜貝塚・田柄貝塚の資料によってこれを補いたい。

図14-1は岩手県大洞貝塚C地点出土資料で、後期末葉の瘤付土器期後半のものだという(馬目1983)。索孔より下側を欠くが、頭部直下はくびれている。2・3は宮城県田柄貝塚出土資料で、後期後葉の宮戸Ⅲa式期に伴う(宮城県教育委員会他1986)。ともに頭部直下がくびれ、刃溝の両脇にX字形の刻みが入り、頭部全体にアスファルトの付着がみられる。3は刃溝が横方向である。4は宮城県浦島貝塚出土資料で、晩期前葉の大洞BC式期とされている。馬目(1967)が「素体複孔銚頭」として論じた資料で、頭部直下に鏃固定孔をもつ三距の銚頭である。5～7は里浜貝塚出土の刃溝をもつ銚頭頭部破片で、いずれも大洞C2式期に位置づけられている(小井川・山田2002)。5は頭部直下がくびれるが、刃溝の両側面にX字形の刻みが入り、先端両側に糸掛けの突起をもつ<sup>16)</sup>。8は大洞C2式期の瀬澤貝塚出土資料である(渡辺1973)。9は大洞貝塚B地点から出土した資料で、大洞C2～A式期に伴ったということである(馬目1983)。出土遺跡は異なるが、6～9はいずれも頭部直下の側面に逆鉤状突起をもつ資料である。7はさらに側面にも刻線が入る。

これらの資料にみられる、くびれ、鏃固定孔、逆鉤状突起などの頭部の加工は、いずれも刃溝への鏃の装着に関わる機能をもっている(馬目1967)。非常に限られた資料からではあるが、燕形銚頭においては、おおまかに「くびれ→鏃固定孔→逆鉤状突起」という頭部形態の時期的変化を読み取ることができるだろう。これは、いわき地方における第一段階から第三段階にかけての真石型の頭部形態の変遷過程(a類→b類→c類)とよく対応している。年代観についても、第一段階は後期末葉～晩期前葉、第二段階は大洞BC式～C2式期、第三段階は大洞C2式期に位置づけられており、特に齟齬はみられない。

以上の検討から、いわき地方の真石型銚頭と仙台湾・三陸地方の燕形銚頭の頭部形態の時期的変化に対応関係がみられることが分かった。これは鏃固定に関わる技術が両地域間である程度共有されていたことを示しているのかもしれない。索孔の有無や尾部形態などについては一貫して地域差が大きいのと比較して、興味深い現象であるといえよう。

## 5-2 弥生時代の日本列島東北部

仙台湾・三陸地方では、骨角製漁撈具が盛んに作られた縄文晩期中葉までとは打って変わって、晩期後葉とそれ以降の銚頭の出土例はほとんどない。数少ない資料である弥生時代初頭の鳳寿寺貝塚出土例は、横方向の索孔と単距の尾部をもつ(渡辺1995)。

いわき地方は、縄文時代晩期中葉をピークに、寺脇型・真石型などの閉窩式銚頭が盛行した地域である。その後、晩期後葉から弥生時代前期にかけて、燕形銚頭の直接の流入とその影響下での真石型への索孔の導入が行われる。前項でみたように、縄文時代晩期中葉までは、頭部形態では仙台湾・三陸地方と共通した変遷をみせるが、胴部・尾部形態においては独自性を保っていた。したが

って晩期後葉から弥生前期にかけての時期の間に、仙台湾・三陸地方との関係に大きな変化が生じたことが分かる。このような変化の結果、弥生時代中期前半に薄磯型が成立する。頭部に刃溝をもち、尾部は双距である。

関東地方は縄文時代を通じて基本的に閉窩式銚頭の分布圏外であったから、弥生時代中期後半に出現する三浦型銚頭が、他地域から流入して成立したことは間違いない。最初に尖頭で単距・双距のタイプが現れ、後期になってから刃溝をもつ資料や三距の資料が確認される。

これに対して、北海道は開窩式銚頭の分布圏であり、縄文時代に遡る閉窩式銚頭の確実な例はない。筆者は、主に北海道南部における続縄文時代前半期の閉窩回転式銚頭の変遷過程について論じたことがある（高橋 2001・2004）。大まかには、頭部は刃溝をもつタイプからスプーン状の鍍装着面をもつタイプへ、尾部は三距から単距へ、という変化の方向性がある。また、小幌洞窟遺跡出土資料を、北海道における閉窩式銚頭の最初の段階に位置づけた。この資料は縦方向の索孔をもつ三距の銚頭であるが、刻線による装飾などすでに北海道的な特徴を有していることを指摘した。

ここで各地の資料を比較してみると、頭部形態、尾部形態などにおいて地域的まとまりがみられる一方で、それぞれの地域間の懸隔は大きいことが分かる。したがって、少なくとも仙台湾・三陸地方→いわき地方→三浦半島、などというような玉突き状の漸進的な伝播を想定することは難しい。地域間で比較した場合の共通点は、結局のところ横方向の索孔という点に帰着する。現在までに知られている横方向索孔の銚頭としては、中期初頭の鳳寿寺貝塚出土資料が最も古いから、仙台湾で発生したものが各地に広がった後に各地で独自の形態を発達させたとも考えることも、不可能ではない。しかし、横方向の索孔の出現過程を検討すると、在地的伝統の真石型銚頭に燕形銚頭が影響を与えて横方向の索孔を導入（いわき地方）、最初から横方向索孔の銚頭が流入（三浦半島）、縦方向索孔の銚頭が流入後、横方向に転換（北海道）、というように、地域ごとにより異なっている。

筆者は、横方向索孔の出現という現象について、ある特定のセンターから一元的に広がったと考えるのではなく、燕形銚頭に存在した縦方向索孔の規制が失われた結果だという解釈を示した（高橋 2004）。ただ、燕形銚頭における縦方向索孔の規制の意味について、それが技術的・機能的なものであったのかどうかを含めて一切明らかではないために、横方向索孔の出現という現象のもつ意味を説明することができず、観念的な解釈になってしまっている側面は否めない。しかし、本稿で明らかにしたように、各地域において横方向索孔をもつ閉窩式銚頭の出現・変遷過程が多様であるらしいということは、筆者の考えを支持するものだといえよう。

## 6 おわりに

以上、福島県いわき地方と神奈川県三浦半島の両地域における閉窩式銚頭の編年的研究を行い、地域間関係について若干の考察を試みた。銚頭のような骨角製狩猟漁撈具の研究においては、資料の偏りから議論の精度が粗くなる傾向があるため、本稿ではそれぞれの地域における銚頭の変遷過程そのものの解明に主眼を置いた。このため、刃溝に装着された鍍の問題や、東海地方や西日本の

資料について検討することができなかった。列島全体を視野に入れた新たな解釈の枠組みの構築とともに、今後の課題としたい。

## 謝辞

本稿執筆にあたっては、東京大学考古学研究室の先生方をはじめ多くの方々にご教示を頂いた。また、下記の方々・機関には資料の閲覧等に関してお世話になった。記して感謝したい。

猪狩みち子、江坂輝弥、樫村友延、川口徳治朗、佐藤勝比古、佐藤孝雄、中山雅弘、松嶋直実、いわき市教育文化事業団、神奈川県立歴史博物館、慶應義塾大学民族学考古学研究室（敬称略・五十音順）

## 註

- 1) 確認できた資料は全て鹿角製であり、それ以外についても鹿角製である可能性が高い。
- 2) 続縄文文化の銚頭については、設定者である長谷部言人も「燕形銚頭」に含めていなかった。「燕形銚頭」の設定（長谷部 1926 a）と同年、長谷部は北海道室蘭市本輪西貝塚出土の銚頭を報告している（同 1926 b）。その際に、同貝塚出土の閉窩回転式銚頭に対しては「燕形銚頭」の語は用いられず、この資料と対比するために、「陸前、陸中の貝塚から出る燕形銚頭」「陸前地方の燕形銚頭」という表現が用いられているのみであった。この用語法は、本輪西資料を北方系統だとする長谷部の系統観を反映したものであったと考えられる。
- 3) このうち距（けづめ）という用語については、最近一部の研究者によって、続縄文文化やオホーツク文化の銚頭の尾部先端にみられる小突起を指して用いる例がみられる（富田 2004, 種市 2004 b : 後者は「蹴爪」と表記）。しかし、「距」は八幡一郎（1924）の論考以来、英語の spur に対応するものとして、回転式銚頭の尾部にある逆鉤全体を指して用いられてきた用語であり、本稿でもそれに従う。
- 4) これらの遺跡については、各報告書に詳細な調査研究史・文献リストが掲載されている。
- 5) ただし実際の運用においては、遺跡名による分類名称が地域的・時期的なまとまりを越えて適用されている場合がある。例えば、「一王寺型」は、設定の根拠となった是川中居遺跡出土資料とは乖離して、実質的に「開窩式」と変わらない使われ方をしている（渡辺 1995 など）。その一方で、「一王寺型」の名称のもつ系統関係の含意は残されているという問題点がある。「寺脇型」については、資料が限られていることもあり、このような問題は生じていない。
- 6) 銚頭の抵抗機能による分類基準については、別稿を参照されたい（高橋 2001）。
- 7) IV 期 a ~ c・V 期は、それぞれ報告書における薄磯 II ~ V 期に相当する（いわき市教育委員会 1988）。
- 8) このように「有脚型」を燕形銚頭の祖形とする考えに対しては、資料不足を指摘する意見や（金子・忍澤 1986）、「有脚型」が銚頭であるかどうかを疑問視する意見（佐藤 2002）がある。
- 9) 『寺脇貝塚』では図 7 - 2 の資料が尖頭に復元されている。確かに平面形態は尖っているが、側面観は尖っておらず、先端近くで折れているとは考えられない。折れ口がたまたまこのような平面形態になったものだと考えられ、頭部形態は不明とせざるを得ない。
- 10) 『寺脇貝塚』には、「江坂輝弥氏発掘品」として 5 点の閉窩式銚頭が掲載されているが、うち 2 点（図 4 - 4, 図 8 - 7）は『小名浜』では報告されていない。
- 11) 6・7 層は A 1 区のみ部分的にみられた堆積である。
- 12) なお馬目（1980）は、「弥生時代の閉窩式廻転銚は中期段階と後期段階には形態上の差異がある」と述べている。おそらく三浦半島の資料についての指摘だと思われるが、どのような内容を指してい

たのかは明らかではない。

- 13) 神澤 (1988) による集成では大浦山洞穴からは 3 点の閉窩式銚頭が出土したとされているが、報告書 (三浦市教育委員会 1997) にしたがって 2 点としておく。
- 14) 池子遺跡からは弥生後期～古墳前期とされるもう 1 点の出土が報告されているが、未成品であるため本稿では扱っていない (かながわ考古学財団 1999 a)。
- 15) 1958 年の概報では本報告と層位名称などにやや違いはあるが、宮ノ台式土器に伴ったされる点には変わらない (赤星 1958)。
- 16) 種市 (2004 a) は、このような糸掛けの突起を「紐などによって銚先鏃を巻きつける装着方法」を示すものとした上で、燕形銚頭におけるアスファルトを用いた鏃固定法とは「明確に異なる伝統」、すなわち北方系の要素だと主張している。しかし、図 14-5 の資料は燕形銚頭に糸掛けの突起をもつ頭部が存在することを示すだけでなく、アスファルトの付着が著しい。実際には、燕形銚頭においてもアスファルトと紐が併用されていた可能性がある。

#### 引用文献

- 赤星直忠 1952 「金石併用時代の漁民：三浦半島出土弥生式遺物に拠る」『漁民と対馬』九学会年報 4 : 60-82
- 赤星直忠 1953 「海蝕洞窟：三浦半島に於ける弥生式遺跡」『神奈川県文化財調査報告』20 : 53-143
- 赤星直忠 1958 「大浦山洞穴の概要」『横須賀考古学会年報』3 : 72-76
- 磐城高等学校史学部後援会 1980 『薄磯貝塚』
- 磐城市教育委員会 1966 『寺脇貝塚』
- いわき市教育委員会 1988 『薄磯貝塚』いわき市埋蔵文化財調査報告 19
- いわき市教育委員会磐城出張所 1968 『小名浜：小名浜湾周辺の遺跡調査報告集』
- 江坂輝弥・渡辺誠 1968 「寺脇貝塚発掘調査報告」『小名浜』いわき市教育委員会磐城出張所, 157-218
- 大竹憲治 1985 「東北地方南部出土の弥生時代骨角製品」『古代文化』37(5) : 42-46
- 大竹憲治 1987 「いわき周辺弥生時代の骨角器」『月刊文化財』290 : 31-34
- 大竹憲治 1988 「いわき地方の釣針と銚：東南北部の漁撈文化」『季刊考古学』25 : 31-4
- 大竹憲治 1989 『骨角器』ニュー・サイエンス社
- 大竹憲治 1991 「弥生時代における閉窩式離頭銚の南進と北進」『十勝考古学とともに：少壮の考古学研究 者佐藤訓敏君を悼む』十勝考古学研究所, 63-69
- 海外洞穴調査団 1983 「三浦市海外洞穴調査の概要」『横須賀考古学会年報』26 : 1-17
- 神奈川県立博物館 1973 『間口洞窟遺跡：本文編』神奈川県立博物館発掘調査報告書 7
- 神奈川県立博物館 1974 『間口洞窟遺跡(2)』神奈川県立博物館発掘調査報告書 8
- かながわ考古学財団 1999 a 『池子遺跡群 IX』かながわ考古学財団調査報告 45
- かながわ考古学財団 1999 b 『池子遺跡群 X』かながわ考古学財団調査報告 46
- 金子浩昌・忍澤成祝 1986 『骨角器の研究』2, 慶友社
- 神澤勇一 1959 「三浦市間口洞窟出土の弥生式土器」『横須賀市博物館研究報告 (人文科学)』3 : 32-36
- 神澤勇一 1988 「三浦半島の弥生時代漁具」『季刊考古学』25 : 41-44
- 岸上謙吉 1911 「Prehistoric Fishing in Japan」『東京帝国大学農科大学紀要』2 : 327-382
- 北田 勲 2002 「縄文時代東北地方太平洋岸域における骨角製漁撈具の起源と伝播」『岩手県文化振興事業 団埋蔵文化財センター紀要』11 : 37-64
- 剣持輝久 1972 「三浦半島における弥生時代の漁撈について」『物質文化』19 : 11-22
- 剣持輝久 1993 「三浦半島出土の弥生時代から室町時代の漁労具について：釣針・網錘・回転銚頭・アワ ビオコシ」『小坪の漁労具』逗子市文化財調査報告書 15, 65-79
- 小井川和夫・山田晃弘 2002 「里浜貝塚西畑地点出土遺物」『東北歴史博物館研究紀要』3 : 45-136

いわき地方と三浦半島の閉窩式銚頭

- 佐藤典那 2002 「燕形離頭銚の起源」『地域考古学の展開：村田文夫先生還暦記念論文集』99-104
- 設楽博己 2003 「続縄文文化と弥生文化の相互交流」『国立歴史民俗博物館研究報告』108：17-44
- 高橋 健 2001 「続縄文時代前半期の銚頭の研究」『東京大学考古学研究室研究紀要』16：83-137
- 高橋 健 2004 「続縄文文化の回転式銚頭」『北方探究』6：13-26
- 種市幸生 2004 a 「続縄文文化の銚頭の頭部について」『金子浩昌著作目録』2，192-201
- 種市幸生 2004 b 「根室市弁天島遺跡出土の銚頭について：特に前田E群閉窩型」佐藤隆広氏追悼論集刊行委員会『北方世界からの視点：ローカルからグローバルへ』北海道出版企画センター，155-164
- 樋泉岳二 1999 「池子遺跡群No.1-A地点における魚類遺体と弥生時代の漁撈活動」『池子遺跡群 X』かながわ考古学財団，331-338
- 東京国立博物館 2003 『東京国立博物館図版目録 縄文遺物篇（骨角器）』
- 富田恵子 2004 「礼文島における銚頭の変遷：銚頭からみた初期オホーツク文化の研究」『物質文化』77：21-38
- 西村正衛 1968 「真石貝塚の調査」『小名浜』いわき市教育委員会磐城出張所，221-228
- 長谷小路南遺跡発掘調査団 1992 『長谷小路南遺跡』
- 長谷部言人 1926 a 「燕形銚頭」『人類学雑誌』41(3)：141-145
- 長谷部言人 1926 b 「本輪西貝塚の鹿角製銚頭」『人類学雑誌』41(10)：471-475
- 前田 潮 2000 「恵山文化の銚頭について」『海と考古学』2：15-22（再録：『オホーツクの考古学』75-83）
- 馬目順一 1966 「鹿角製漁撈具と水産資源の獲得について」『寺脇貝塚』磐城市教育委員会，157-177
- 馬目順一 1967 「素体複孔銚頭」『物質文化』10：9-14
- 馬目順一 1980 「鹿角製釣針と廻転式銚頭」『薄磯貝塚』磐城高等学校史学部後援会，81-97
- 馬目順一 1982 「釣獵と銚漁：いわき地域を中心に」『季刊考古学』1：39-42
- 馬目順一 1983 「閉窩式回転銚」『縄文文化の研究』7：210-224
- 三浦市教育委員会 1997 『大浦山洞穴』三浦市埋蔵文化財調査報告書4
- 宮城県教育委員会・建設省東北地方建設局 1986 『田柄貝塚Ⅲ』宮城県文化財調査報告書111
- 八代義定 1932 「福島県藤原川流域の石器時代遺跡と其年代」『人類学雑誌』47(4)：149-161
- 山浦 清 1996 「日本先史時代回転式銚頭の系譜」『ヒト・モノ・コトバの人類学』545-556（再録：山浦2004b）
- 山浦 清 1999 「漁撈具から見た弥生文化と恵山文化」『物質文化』66：35-44（再録：山浦2004b）
- 山浦 清 2004 a 「日本列島雌型銚頭の系譜問題と韓半島」『立教大学日本学研究所年報』3：90-100（再録：山浦2004b）
- 山浦 清 2004 b 『北方狩獵・漁撈民の考古学』同成社
- 八幡一郎 1924 「石鏃を附加する骨銚」『人類学雑誌』39(2)：94-95
- 横須賀考古学会 1984 『三浦半島の海蝕洞穴遺跡』
- 横須賀市教育委員会 1994 『埋蔵文化財発掘調査概報集Ⅲ：平成4年度分』横須賀市文化財調査報告書28
- 渡辺 誠 1973 『縄文時代の漁業』雄山閣
- 渡辺 誠 1995 「東北地方における一王寺型（閉窩式）離頭銚頭について」『みちのく発掘：菅原文也先生還暦記念論集』305-314
- 渡辺 誠 2000 「弥生・古墳時代における回転式離頭銚頭の研究」『琉球・東アジアの人と文化』下，高宮廣衛先生古稀記念論集，1-12

図の出典

図3中央：西村 1968より転載。図4-1, 図6-4・5, 図8-14・15：江坂・渡辺 1968より転載。図4-2～4, 図14-8：渡辺 1973より転載。図4-5, 図8-16, 図6-1・9・10, 図9-3：いわき市教育文化事業団所蔵。筆者の実測による。図4-6：慶応義塾大学所蔵。筆者の実測による。図4-7, 図6-6～8, 図8-1～6・8・9・11～13, 図9-1・2・4：いわき市教育委員会 1988より転載。図6-2・3・11, 図7-2, 図8-7・10：磐城市教育委員会 1966より転載。図7-1：渡辺 1973を一部修正。図10-1・2：馬目 1980より転載。図13-1・2：三浦市教育委員会 1997より転載。図13-3・4：かながわ考古学財団 1999bより転載。図13-5：劔持 1972より転載。図13-6：渡辺 2000より転載。図13-7・11：神奈川県立博物館 1973より転載。図13-8：大竹 1991より転載。図13-9：赤星 1953より転載。図13-10：神奈川県立博物館 1974を一部修正して再トレース。図13-12：横須賀市教育委員会 1994より転載。図14-1・4・9：馬目 1983より転載。図14-2・3：宮城県教育委員会他 1986より転載。図14-5～7：小井川・山田 2002より転載。

(転載とした中には、欠損箇所を復元部分を筆者が修正したものが含まれている。)

【追記】

本稿校正中に、一部重なる時代・地域の資料を扱った下記の論考が刊行された。山浦は弥生時代から古代までの仙台湾周辺の回転式銚頭を集成し、東北地方太平洋岸における漁撈民の多様化を論じている。設楽は「側面索孔燕形銚頭」に注目して銚頭に関する文献を広く渉猟し、東日本の弥生時代の漁撈文化を類型化してその成立過程を考察している。扱っている資料には重複する部分があるが、索孔の方向転換という現象についての理解は本稿のものとは異なる。

- 山浦 清 2005「東北地方太平洋岸弥生時代以降における漁撈民の多様化：仙台湾周辺出土回転式銚頭を手がかりとして」『海と考古学』海交史研究会考古学論集刊行会編，六一書房，285-298
- 設楽博己 2005「側面索孔燕形銚頭考：東日本弥生文化における生業集団編成のあり方をめぐって」同上，299-330



# Closed Socket Harpoon Heads from Iwaki Region and Miura Peninsula

Ken Takahashi

This paper discusses the typology and chronology of the closed socket harpoon heads of Jomon and Yayoi period, specifically those of the Iwaki Region and the Miura Peninsula (Fig. 1).

Closed socket harpoon heads of the Iwaki Region, Fukushima Prefecture, are divided into three types: Terawaki, Maishi and Usuiso (Fig. 2). Maishi type, with a line groove instead of a line hole, is subdivided into 4 subtypes (a~d) by the frontal shape (Fig. 3), which probably served as a fixing device of the end blade. Based on the stratigraphic data at the Usuiso and Terawaki sites, the closed socket harpoon heads of the Iwaki Region are chronologically divided into five stages (Fig. 11), which cover from the end of the Late Jomon period to the first half of the Middle Yayoi period. Usuiso type, with a line hole at right angle to the spur, appeared by the first half of the Middle Yayoi period.

Closed socket harpoon heads of the Miura Peninsula, Kanagawa Prefecture, are given the name “Miura type”. Miura type harpoon heads are subdivided into three subtypes (a~c) also by its frontal shape (Fig. 12). A chronological order (subtype a→b→c1→c2) can be derived from the typology and the association with the pottery, though it needs more data through further excavations. The subtype-a of the Miura type, with a conical tip, appeared on the Miura Peninsula in the second half of the Middle Yayoi period.

A Tsubame-gata (swallow-shaped) type harpoon head, which flourished in the middle Tohoku region in the Late and Final Jomon period, usually has a line hole parallel to the spur. On the other hand, Usuiso type and Miura type are characterized by having a closed socket harpoon head with a line hole at right angles to the their spurs, a common feature of the closed socket toggle harpoon heads of Hokkaido in the first half of the Epi-Jomon period. This “change in the line hole direction” has often been explained as the result of a strong cultural diffusion, which spread from the middle Tohoku region. This paper, however, illustrates that harpoon heads with line holes at right angles to the spurs appeared through different processes in each area. Therefore, instead of assuming a strong diffusion from a cultural center, the “change in the line hole direction” should be interpreted as a result of the extinction of the Tsubame-gata type harpoon head, which had a strong tradition of a line hole parallel to the spur.